



鼠とねずみの  
ドツペルゲンゲ

福田鼠

## 一、鼠と二週間と井上店長

鼠という男がいる。

鼠は大学を辞めてピザの宅配をして日々を暮らしている。

鼠はピザ屋の店長のことが好きである。

鼠は日々絶望している。

鼠とは実にありきたりな男である。

鼠は人生を愛している。

鼠がネズミと呼ばれるようになったのは中学の頃。彼の前歯を見て友人が付けたあだ名である。彼の前歯は随分と前に出ている。幼少の時、指を吸う癖が治らず、親指の圧力に従い前歯がぐいぐいと前に出てきてしまった。

彼はネズミと呼ばれることに不快を感じることもあったが、親しまれやすい呼び名ができたことをしめたものだと考えもした。彼は自らをネズミと名乗った。高校に入っても彼はネズミと名乗った。周りの友人は彼をネズミと呼んだ。

しかし、大学に入ると彼は自分のことを上手く名乗れなくなった。原因としては、ネズミは大人になったのかもしれない。或いは、彼は一人、遠くの県外の大学に出ていることもあり、友達が上手く作れなかったこともある。交流はあるが、ネズミであると名乗るほど深い仲だとは思えなかった。

彼はネズミと呼ばれなくなった。

ネズミと呼ばれなくなって二年も過ぎた頃。彼は部屋で一人で本を読んでいる時、鼠という漢字を見つけた。鼠という漢字は彼を大いに喜ばしめた。

オレはネズミでなく、鼠だ。

彼は自らを鼠とした。誰に呼ばせるでもない。ただ、自分のみが自分を鼠と呼ぶようになった。

鼠となって一年ほどして彼は大学を去った。

鼠はどうして大学を辞めよう。

大学を辞めるとは鼠の生きる世界では、職に就きにくくなることを意味する。鼠がいる世界では職を得ねば金がもらえず、金が無ければ飯が食べぬ。大学を辞めるは、鼠が暮らしていくには不都合なことである。

鼠は学問を嫌いだとは思わなかった。学問は素敵だと思った。鼠は数学を専攻していたが、数字と数字がつながる瞬間に面白さを覚えた。数字を抽象的に扱うことで、性質が生まれ、定理が立つことに感動を覚えた。幼い頃に誰もが感じたパズルの面白さ。鼠は数学という学問に対して誠実だった。

鼠は次のように考えることがあった。世界の全てが数学のように一本の紐を手繰ればほつれていき、ばらばらになる。勿論、本気でそう信じたわけではない。数学と現実の違いを鼠は分かっている。同じ次元の上で考えるべきものではない。鼠は分かっている。しかし、鼠はわざ

と間違った経路をもって世界を考えることを楽しんだ。

鼠が大学を辞める直接の原因となったのは或る二週間のせいだろう。

まだ鼠が大学に在籍していた十一月の或る日。鼠は赤ワインとパスタ、缶入りのミートソースを大量に買い込んできた。靴を脱がず一人暮らしの狭い部屋に入ると、小さな窓のカーテンをぴたりと閉め、照明を落とし蝋燭を一本だけ点けた、玄関に鍵を掛けた。薄暗い部屋の中でゆっくりと赤ワインを飲んだ。一時間と二十三分かけて赤ワインを一本飲み干すと、部屋に唯一の時計の電池を抜いた。

デスクのスタンドライトを付け、数学の本を開いた。机の横に積まれた白紙に手当たり次第に数式を書く。彼は幾時間かそうして過ごした。カーテンがぴたりと閉ざされた暗い部屋の中では、時間は分からない。疲れると靴を履いたままベッドに横になった。勝手に目が覚めるまで眠り、起きると赤ワインを飲み、腹が減ればパスタを茹で、数学の本を開き、また眠りたくなればベッドに倒れた。鼠の一日は二十四時間から解放され、鼠が眠りたくなれば一日が閉じた。鼠の睡眠時間も、起きている時間も、二十四時間を一日とする世界と比べればかなり短かった。鼠の一日は外の世界の半日も無かったろう。時々、音楽を掛けた。音楽だけが正常な時間感覚を持って流れた。

鼠の日々は淡々と過ぎた。或る朝、どうしても解けない問題がいくらか溜まり、膝が上手く伸びないと思った。鼠は元の世界に帰るべき時を感じた。

疲労のたまった体を窓際まで移動させ、カーテンに手を掛けた。カーテンが開かれた世界は鼠の予想に反して暗かった。鼠が朝だと思っていた時間は外では夜だった。光を期待して開いた世界の闇。鼠はどうにもできない悲しみを感じた。鼠はそのままワインを飲むことも、パスタを茹でることも、数学の本に向かうこともなくベッドに眠った。強い光が鼠の瞼の裏を刺して、鼠はやっと元の世界に戻った。鼠はシャワーをひねり、熱い湯で体を洗い、髭を剃った。外の世界では二週間が経っていた。

外の世界に戻った鼠が始めにしたのは歩くことだった。ただ、彼は歩いた。赤ワインのアルコール、人間という生物として不規則だった生活リズムが彼の体を重たくした。しかし、彼はただ歩き続けた。日が沈むまで東へ歩いた。日が沈むと近くのビジネスホテルに泊まり、朝が来ると、また、歩いて自分の住む町まで一日かけて戻ってきた。近所の定食屋で二人前の飯を食い、部屋に戻ると泥のように眠った。

元の世界に戻ってから三日目に大学に行くと、講義は実に退屈なものになっていた。

講義を終えた後、個人的に教授の元へ、独力では及ばなかった問題、証明の解説を求め、行った。教授は講義に口クに出席せず、講義とは違ったところの質問に来た鼠に対し冷淡だった。教授の部屋を出たとき鼠は二週間の成功を感じた。

同時にこれまでの人生の失敗を感じた。

数学をやり続けた鼠の頭は論理的に自分の感じた成功と失敗の定義について考えた。

二週間の独学により、自分は予想通りの成果を出した。成功である。一方、自分が二十年余りの人生で信じてきたものは、社会の力だった。数学は大学でなくてはできないと信じていた。人生は何かしらの形で数学とともにあると感じていた。鼠は自らの力でこれまで生きてきた世界に

挑んだ。二週間前まで信じていた世界は鼠の中で虚構となった。

翌る朝、鼠は退学届けを出した。

鼠の二週間は普通の人からすればかなり変わった事だったろう。鼠にとっても自分の人生の中でそんな事態が起きるとは思ってさえいなかった。どうして、あんな二週間が起きたのか、鼠にも分からなかった。ただ、気付いたら鼠はあの二週間を経過してしまっていた。大きな川の上を流れる木の葉のように、ただ自然に流れるままに。

鼠は普段は実にありきたりな男である。彼が変わっているとしたら、自分のことを鼠として、そしてふとした二週間、そのくらいである。それ以外は実に普通の大学生と変わらなかった。しかし、鼠はもう大学生ではない。

退学届けを出したものの実家にも帰りづらい。鼠の父はしががないサラリーマンである。母もまたしががない主婦である。鼠には仕事のあてもなかった。鼠は、大学を辞めたことと、しばらく今の家に住むこと、アルバイトをしながら当面の家賃は自分で払うこと、を手紙に書き、両親に送った。一週間と経たずして、両親が両親が鼠のアパートへやって来た。

遥々来たものの、辞めてしまったものを今さらどうにもできない。鼠には実家へ帰る意志はない。バイトをしていた分の貯蓄もあるから、当面の家賃はある。

「勝手にしろ」

父親はそう言わざるを得なかった。母親は涙を流さざるを得ない。

鼠はピザの宅配のバイトをしていた。銀河ピザというふざけた名前の店だった。店長に、大学を辞めたのももう少し働きたい、という事情を話すと、折りよく隣の店舗で人が足りていないということだった。

鼠のピザ配達人としての生活が始まる。学生のアルバイトではない。鼠はただピザを運ぶことだけで生活をするのだ。

店舗のエリアが変わっただけで仕事の内容はさほど変わらない。鼠は自分で考えていたよりも早くピザ配達人としての生活に慣れていった。

隣の店舗の店長は井上と言う実に穏やかな男だった。若い男だった。鼠より上だが、五歳と離れていないだろう。鼠の顔は年の割りには老けている。井上店長は童顔というわけじゃないが、どこかに幼さ、もしくは無邪気さとも言うのだろうか、少年らしい面影がある。ひょろりと細く、背は高く猫背。目はいつも眠たそうだった。その風貌通り、仕事ができる人間だとは言いがたかった。バイトの間では仕事が遅いことで嫌われもしたが、管理職としての仕事、やかましく指示をする、叱るといことがなかったので好かれもした。そもそも無口な人間だった。

バイトは当然、店の売り上げなど気にしない。店に対し責任はない。あるのは貰う時給と、それに見合った時間の労働。鼠としても売り上げなどどちらでも良かった。ただ、せっかく働くのなら一生懸命やろうと考えた。鼠は、大学にいたから一生懸命数学をした、ピザ配達人になれば一生懸命バイクを走らせる、そういう男である。雇われ店長の井上はボーナスのことを考えると売り上げも少しは気にしている風もあった。ボーナスは売り上げに応じて出た。だが、実際のところ、井上がどれほど売り上げについて考えていたかは分からない。社員としては問題の多い男だとも言えた。しかしながら、穏やかな性格からかバイトたちからは親しまれていたし、最低限の仕事はしていたので、雇われ店長としてクビになることはないらしい。

そんなぼんやりとした井上店長の趣味は車だった。車を改造して峠やサーキットを走る。彼の

唯一の趣味だった。その他のことに彼は関心がないようだった。彼は終止ぼんやりとしていて、通勤の度に二輪か車かのエンジンの轟音響かせ職場へやってきた。

ある日の深夜、鼠は揚げ物のラードを換えていた。フライヤーにある古いラードを廃棄し、新しく一斗缶に入った固形のラードを、ガスで加熱して溶かし、フライヤーに注ぎこむという作業である。井上と鼠、二人きりのシフトだった。井上は裏の休憩室で雇われ店長の仕事、報告書が何かを書いていた。実際には車の雑誌を読んでいるのだろうと鼠は思ったが、不思議と鼠は井上に対して腹は立たなかった。鼠はただ自分の仕事をする。鼠は一人、店内でラードを変えていた。

鼠はいつものように古い黒くなった粘り気のあるラードを廃棄し、新しいラードの缶をガスにかけた。しばらくすると、缶の底から赤い炎が上がり始めた。一斗缶の底に穴が開いていて、ラードが漏れているのだと分かった。ガスの元栓を閉じて、裏まで走って井上を呼んだ。井上は、煙草を啜って天井に向かって輪を作っていた。

「すみません、火事、火事って言うほどではないんですけど、すみません、ラードが大変なことになりました。すみません」

井上は、もう一煙吐き出してから煙草の火を消して、ゆっくりと立ち上がった。最後の煙は綺麗な大きな円になった。

鼠が小走りで店舗に戻る。井上も走る。しかし、鼠には井上がどうにも走っているように思えない。実際、井上はいつもの五割増し程の速さで足を回転させて鼠の後ろをついてきていたが、前を走っている鼠には、不思議と井上がのんびりと足を引きずっていつもの猫背でゆるりと歩いて来ているような気がするのである。

ラードの炎は少しばかり大きくなっているように見えた。一斗缶の底からぱたぱたと溶けたラードが雨漏りのように垂れて赤い炎を上げている。

「おお、燃えているなあ」

井上がいつもと変わらない口調で言うものだから、

「このラードは時々こうなるんですか？」

と鼠が聞くと、

「いや、俺が店長になって二年ほどになるけど初めてだよ」

井上はぼんやり眺めたまま言う。鼠にも井上のゆったりした態度が感染ったのか、焦った気分はなくなっていた。

井上は軽量カップに水を少し、だいたい三十ccほど汲み、ラードの火の元にかけた。ブアッと爆発音が上がり火が二倍近く上がった。爆発音と言っても井上の隅々まで改造された車のエンジン音と比べれば可愛いものだったが、ここで初めて井上がたじろいだ。炎が上がっているのを見ても顔色一つ変えなかったが、さすがに目の前で小さな爆発が起きては驚いたらしい。

鼠は水蒸気爆発だと分かった。

「びっくりした。ああ、油火災には水をかけちゃまずいんだっけ」

井上はもう元通り平然とした風に戻っている。平然として落ち着いてはいるが、「はて、どうしようか。消火器を使うと後片付けなんかが面倒だしなあ。そもそも、あの消火器ちゃんと使え

るかな」と、いつもより少し口数は多い。しかし、特に何をすることもなく炎を眺めているだけである。鼠も隣で平然と炎を見ている。しかし、炎はどんどん育って行く。長身猫背の井上の鼻ほどまで火は登っている。このまま一斗缶の中の大量のラードに引火すれば店は全焼だろう。

「濡れたタオルを被せるってテレビで言ってましたよ」

鼠は言う。責任は無いにせよ、バイト先が全焼するのは困る。井上店長は大丈夫だろうが、地方チェーンの貧乏ピザ屋のことだから、燃えてしまえば復帰まで時間は長いだろう。幸い、引火している部分はさほど広くない。缶から漏れてコンロの上に少したまった油だけである。井上と鼠は一斗缶の周囲を、アチッ、アチッ言いながら濡れたタオルで包んだ。

火が消えると、溶けたラードをフライヤーに流し込み、コンロ周りに散った油を掃除してしまうと、井上店長はまた裏の休憩室に戻っていった。注文が入れば、表に出てきて、ピザを作ってオーブンに入れる。鼠が宅配に出ている間は店番で店舗の方にいるが、鼠が帰ってくると休憩室に引っ込む。閉店の片付けをする頃に出て来ると、テレビで見たニュースのことでも話すように、「さっきの火事すごかったなあ」などと言っている。

「でも、どうしてあんなに落ち着いていたんですか」

「慌てたって火は消えないでしょ。というか、俺、高校ぐらいの頃から慌てた覚えて無いんだ。慌てるってどんな感じだか半分ぐらい忘れているのかも」

そうして、爆音上げて車を猛スピードで帰らせていく。

この事件以来、不思議と鼠は井上店長のことを良き人だと思った。

月曜日は井上店長はいつも休む。たとえ祝日で店が忙しかろうが、彼にとっては月曜は休みだった。鼠はいつも月曜日は働くことになった。

鼠は、銀河ピザのバイトのメンバーについてうらぶれた連中だと感じた。

松井という男。この男は太っていた。太っている男はそれだけでうらぶれていると鼠は考えていた。勿論、太っていても何か取り柄でもあれば良い。松井は仕事は出来る人間だった。太ってはいるが動きは速い。職場の空気を和ませるのも上手い。高校卒業以来フリーターを続けているそうだ。年齢は井上店長と同じくらいである。なるほど仕事はできるわけだ。昼も別のバイトをかけもち、夜はピザを運ぶ。警察官になる試験を毎年受けているが、受からない。バイトなどせず勉強するか、せっかく仕事ができるのだから、正社員としてどこかで働くべきだろうと鼠は思う。

小田という男。四十を過ぎた男である。本業はトラックの運転手だが、ちょうど鼠と同じ年齢の息子が東京の私立大学に行っているらしく、土日はピザを運ぶ。中年じみた冗談をよく言って、土日の店内を盛り上げる。

笹野という女。年は若かった。半年前に高校を辞めたといういことだ。顔立ちがどこかぼんやりとしていて、美人とは言いがたい。痛んだ茶髪に耳にはピアスをつけていた。実際には太ってはいないのだが、背が低いせいか、顔立ちがぼんやりしているせいか、丸く太っているように見えることがある。見た目こそ若いヤンキーのような格好をしていたが、話の内容は実に普通の女の子で、鼠はどこか柔らかい印象を感じた。

この三人と店長と鼠がメインで入る。

あとは大学生が二人いて、それぞれ週に二日ほど入る。鼠の行っていた大学の学生ではない。鼠のいた大学と彼らの通う大学の偏差値は二十近く違う。うらぶれ大学と鼠は思っていた。

鼠は大学生以外の、自分を含めた五人のメインメンバーについて、実にうらぶれていると思った。自分はもちろん、みんな社会の最下層たる場所にいるような気がした。このピザ屋こそが世界の最下層だと。

鼠が店に慣れ始めると、みんな機を伺っては鼠に聞いた。

「どうして大学を辞めたんですか？」

鼠の頭は論理を組み始める。

「複雑なんですけど、簡単に言うと家の事情ですよ」

鼠の口は嘘を吐いた。相手は一瞬申し訳無さそうにし、素早く話題を変えた。

しかし、鼠はそういった同僚たちのことを嫌いではなかった。ただ、自分を含め、この人間達はうらぶれていると思うのだ。

一人だけ鼠にその質問をしない人間がいた。井上店長である。一回だけ似た質問をしたことがある。面接のときである。隣の店舗からの紹介だが、一応面接があった。

「大学辞めたの？」

井上は履歴書を見ながら聞いた。

「はい、そうです」

鼠の頭はやはり論理を組み、理由を探し始めていた。しかし、井上の次の言葉は、

「そう。どのくらい入れる？ いくらくらい欲しい」

と鼠の予想に反していた。

バイトの人間に限らず、ふと会った大学の友人、大学を辞めたばかりの時に話しに来た両親、誰しものが、鼠に聞いた「どうして？」という質問を井上店長だけはしなかった。

梅雨の月曜だった。天気予報は毎日曇りマークで降水確率四十パーセント。降っても降らなくても当たり。それでも、今年はなかなか雨が降らない年だった。

笹野、痛んだ茶髪の高校中退女と鼠は二人で昼の店番をしていた。昼間のピザ屋は暇だった。「やっぱり、店長は月曜日って車走らせに行くのかな」

笹野はイースト菌とピザミックスの粉に水道水の重さを量りながら言う。若い女の高い声が店内に響く。

笹野は、大学と高校という違いこそあれど、学校を辞めたという点で親近感を持っているのか、鼠によく話し掛ける。

「暖かくなってきたから、最近はバイクって言ってたよ」

「バイクでも車でもどっちでも良いよ。飽きないのかな」

笹野は敬語というものを使わない。

「まあ、好きなんですよ。給料の半分がカードかローンの支払いに消えるぐらい車に注ぎ込んでるくらいだからね」

「何が良いのかな。ガソリンの無駄じゃん、うるさいし。よっこらせっと」

そう言いながら、笹野は量った材料を業務用ミキサーに入れてスイッチを入れる。低い音を立てて水とピザミックス、それからイースト菌が混ざり始める。

「店長に直接聞いてみれば良いじゃん」

「嫌だよ、あの人車の話になったら二時間ぐらいわけの分からないこと話し続けるもん」

「まあ、笹野さんが何とかって言うアイドルユニットを好きなのと同じなんじゃない。店長にとっては車とバイクこそアイドルなんだよ」

「あんな車と一緒にしないでよ。男の人ってみんな車が好きなわけ？」

「いや、どうだろう、僕は別に好きでもないかな。あれば便利だとは思うけど。まあ、また今度店長と二人の時にでも聞いてみとくよ」

タイマーが鳴ってパンが出来上がる。

二人はぺたぺたとパンを切り分けた。鼠は笹野がパンをいじるのを眺めながら、柔らかいパンを掴む柔らかかな雰囲気の子というのには絵になるな、といつも思う。

ピザ屋が閉まった後の深夜、鼠は井上店長の車に乗っていた。車内には二十年前に流行ったJポップが流れている。

ピザ屋の閉店前に笹野と話していたことを、井上に聞いてみたところ、

「一回、一緒に乗ってみるか。今日はバイクじゃなくて、車で来てるからさ」

と満面の笑みで誘われた。山を走りに行くという。

鼠は少しためらった。鼠にとって高速で峠を走るなどあまりに危険だった。だが、一度は乗っ

てみたいとも思っていた。

「カーブは攻めたりしないからさ」

鼠は行くことにした。

車は町の外れの山へと向かう。

鼠がこれまで乗った車とは全く乗り味が違う。実に乗り心地が悪い。よく揺れる上に、エンジン音がやかましい。その方が速く走るということを井上が満面の笑みで説明してくれる。確かに加速なども鼠がこれまで感じたことのないものだった。体がシートに埋もれる。車は勿論、新幹線も、飛行機でも感じたことのない加速感。鼠は快感だとは思わなかったが、確かに、改造した車以外では、ジェットコースターくらいでしか感じるこのできない感覚だった。

山に着いて上り坂になっても車はぐいぐいと走った。井上はゆっくり走っているつもりらしいが、鼠にはかなりの速度のように感じられる。カーブの度に右に左に体が引っ張られる。

山頂の小さな展望台で井上は車を止めた。ドアを開けた途端に湿った暑い夏の空気に森の臭いが鼠の頬に触れた。井上は缶コーヒーを二本買い、一本を鼠にやった。鼠は、一昨日が給料日だったことを思い出した。井上は、給料日後には鼠が特に珈琲など欲しいとも思っていない時でも、突然に缶コーヒーをおごってくれることがよくあった。バイト上がりの時などに、突拍子も無く何も言わず缶コーヒーを一本差し出してくる。給料日前には金が無いので、おごってくれない。

「昼間は昼間で良い」

井上は景色を見ながら言った。田舎の町なので、さほど綺麗な夜景とは言いがたいが、静かな闇の中にぽつりぽつりと灯りが見え、上を見ると星がよく見える。笑った猫の目のように細く赤い月が出ていた。

「バイクの場合、風を切る感じが加わるから、もっと加速感もあるし、カーブも攻めれるから面白い。バイクなら、夜を走る方が良い。暗い山を滑り上がっていくみたいで良い」

井上の目がぎらぎらと嬉しそうに光っているように見えた。その向こうに鼠は流れ星を一本見た。

翌日、鼠は笹野に井上店長とのドライブについて話した。

「何となく車の良さっていうのも分かった気がするよ」

鼠が言うと、笹野は、

「ふーん、わたしにはさっぱり」

そう言ってピザをこねていた。その昼も暇だった。

「でも、店長もお金貯めないとまずいのね」

笹野はやはり話しかけてくる。

「ピザ屋の店長を一生やるにしたって、給料の半分以上がローンに消えるのはまずいでしょ」

「笹野さん、貯金とかしてるの？」

「少しずつだけだね」

「偉いね」

「だって、高校中退だもの。お金は貯めておかないと、誰も助けてくれないし」

「ふーん」

昼の営業が終わり、帰ろうとしていると、笹野が後ろから言った。

「そういえば、メールアドレスとか教えてくださいよ」

ピザ宅配人になって三ヶ月ほどした頃、鼠はよく眠気に襲われるようになった。嫌な眠気だった。どこも疲れたところはないのに眠たい。いくら眠っても眠たかった。しかし、眠りが浅いとは感じない。夢も見ない深い真っ暗な眠りがいつも鼠に訪れた。ただ、良い眠りだとも思えなかった。昼の営業時間が終わり、夜の営業が始まるまでの時間を鼠は休憩室の隅に置かれた畳の上で眠って過ごした。

不思議とピザ屋の三輪バイクに乗っている間は眠たくなかった。しかし、いつ眠気が運転中の鼠を襲うかも分からない。

松井にそのことを相談したところ、

「フリーターというのは、なぜか知らないけど眠たいものなんだよ。俺もいつも眠い。居眠りしていて一回トラックのケツに軽く突っ込んだことあるよ。まあ、トラックの運ちゃん気付いてなかったし、バイクも無事だったからほっといたけど」

「それ、ワシのトラックじゃ。ちょっとイシャリョウ払ってよ。百万ぐらい」

トラックの運転手をしている小田が笑いながら横から言った。

鼠の昼寝の際、笹野は鼠の横で眠るのが癖になっていた。

最初は横になっている鼠に、

「わたしも眠りたいんだけど」

と不機嫌そうに言って来るので、鼠は寝返りを打って、一人寝れるほどのスペースを作ってやった。

「はい、どうぞ」

鼠が半ば冗談で言ったところ、笹野は本当にその一人分だけのスペースに横たわった。鼠は気まずく思った。邪魔っけだとも思った。しかし、バイトの休憩室の畳は誰でも使う権利がある。男女で寝ていると言えど、休憩室で間違いなど起こるまい。単に眠たかっただけに違いない。そうこう考えているうちに鼠は深い眠りに落ちている。

その次の月曜日にも笹野は、

「隣良い？」

と言って、鼠の横に寝た。今度は鼠は上手く眠れなかった。寝たふりをしていた。

隣に眠り始めて三回目の月曜日に、笹野は、

「すみません、腕枕してもらえませんか」

と敬語で言って来た。鼠は何も言わず腕を貸してやった。

「明日が見えないって寂しいですね」

笹野が言った。鼠は何も言わなかった。鼠はぐっすりと眠れた。夜のバイトの時には全く眠気が来なかった。良い眠りだと思った。

それから、笹野はよく鼠の横で寝た。性が交わることはない。鼠は笹野を不憫に思った。口にはしない。口にすれば、笹野はますます不憫になるばかりだと分かっていた。時々、笹野は鼠の体を強く抱きしめた。鼠はいつも寝たふりをしていた。もしくは本当に眠っていることも多かった。笹野が横に眠った日とその翌日は鼠は嫌な眠さを一切感じないことが多かった。

眠気の無い昼には鼠は数学の本を読んだ。数学の本から目を上げた瞬間、鼠はいつも自分ほう

らぶれてしまったと感じた。

十月の月曜の昼だった。昼の営業が終わる間際に雨が降ってきて注文が入った。だれも外に食事に行きたくないせいか雨の日には宅配がよく入った。

灰色の空から降ってくる雨は冷たかった。銀河ピザのロゴの入ったくたびれた雨合羽の内側に水は容赦なく染み入った。鼠は体を濡らしながら、常連の木造のアパートの一番奥の部屋のよく太ったおばさんへとピザを運んだ。半分寝たきりの老人、新規で若いカップルのアパートにピザを運んだ。配達員が鼠しかいなかったせいもあって、営業時間を一時間越えた頃にやっと鼠は休憩に入れた。

「服濡れてるじゃん」

休憩室に入った鼠を見ると、笹野は畳の上で読んでいた漫画を置いて言った。

「あの合羽古いからな。あまり合羽として機能しないんだよ」

「この前、マネージャーが新しいの買ってきてたよ」

制服の赤いポロシャツをハンガーにかけ、鼠はいつものように笹野の横に背を向けて寝転がる

。

「シャツもちょっと濡れてるじゃん」

「ああ、ごめん」

「いや、良いよ。寒くない？」

笹野はそう言って腕を鼠に回し、体をくっつけた。濡れたシャツの向こうの笹野を、鼠はいつもよりも暖かいと感じた。

「僕は鼠って呼ばれてたんだよ」

不意に鼠は言った。

「ネズミ？」

「そう、鼠。出っ歯だからさ。昔の友達、まだ大学に入る前、ちょうど笹野さんと同じくらいの年の頃、そう呼ばれていたんだ」

「悪口なの？」

「いや、仲の良いやつらが親しみを込めて、そう呼んでくれたんだよ」

「今は呼ばれないの？」

「今じゃ、僕が鼠っていうことを知っている人がいないんだ」

「じゃあ、わたしがネズミって呼んでも良い？」

「別に構わないよ」

深い眠りが鼠にやってくる。

起きると、井上店長の声がする。鼠はまずいところを見られたと思ったが、笹野はもういなかった。さっきまで濡れていたのが嘘のようにシャツはきちんと乾いていた。

「配達入ったよ。もうピザできてるから」

店長はのんびりと言うが、鼠は急いで起き上がって制服を着て店舗へと走る。やはり制服も乾

いている。

伝票を読むが、住所の文字がぼやけて見えない。客の名前は「ねずみ」と書かれているように見える。鼠は寝ぼけているのかと思い、目をこすってもう一度伝票を読もうとしていると、いつの間にか後ろに店長が立っている。

「前、一緒に車で行った山のふもとだよ。行けば分かる場所だから行ってごらん」

鼠は急いで、三輪バイクにまたがり、エンジンをかけた。

「少しだけ急いでくれると助かる」店長が店の中からいつものトーンで言うのが聞こえた。「ほんの少しだけね」

店長とドライブに行った記憶を掘り返しながら道を行く。不思議と道を間違える気はしない。

信号に引っかかったところで、雨はどうなったろうと思った。合羽が役に立たないほどの雨が降ったのに路面は濡れていない。それどころか、夜のはずなのに、周りが妙に明るい。信号が青に変わる。アクセルを回す。信号を越えたと思ったところで、急に白い霧に入った。深い霧だった。事故をしないように慎重に進みながら考える。どうして月曜なのに店長がいるのだろうか、笹野はどこに行ったのだろうか。急用ができて代わりに店長が来たのだろうか。

とにかく、急いでくれといわれたのだから早く行かねばならない。配達から帰ってから店長に聞けば良い。

しかし、鼠にはもうどこを走っているのか分からない。

急激な深い眠りが鼠を襲う。

## 二、海月の世界

「おい、注文が入ったぞ」

店長の声がする。

「寝てないで急げ。早くしろ」

頭が重くて、鼠はどうにも起きられない。

「おい、鼠」

その声ではっきりと目が覚めた。鼠は自分を鼠と呼ぶものの存在に驚きながら体を起こすと、そこには鼠の腰ほどの身長の本物の動物の白いねずみがいる。確かにいつもの休憩室に大きな白いねずみが立っている。

「やっと起きたか。配達だ、行くぞ。とにかく制服を着ろ」

白いねずみは井上店長の声で言う。喋り方は全く違う。かなり早口で厳しい。しかし、声は紛れもなく井上店長のものである。鼠は分からないままに、白いねずみの言う通りに制服を着た。いつもの赤い銀河ピザのシャツだが、肌触りが違う。シルクのように柔らかだが、肌に触れると溶けてなくなるような不思議な感触で、暖かく気持ち良い。

「ぼんやりしないで、そら、行くぞ。早く乗れ」

白いねずみは畳を指差している。いつも、鼠が笹野と一緒に眠っている畳である。しかし、いつもと違うのは、畳の片端に五十センチ四方くらいの真っ赤な箱がくっついている。真ん中に制服に入っているのと同じ全く洒落ていない「銀河」という文字のロゴが入っている。鼠はわけも分からないまま畳の上に乗った。

「馬鹿、そんなところで乗ったってどうにもならんだろうが、出発口まで早く持って来い」

井上店長の声で荒々しく白いねずみは言う。出発口とは何か鼠には分からなかったが、とりあえず、白いねずみのいる休憩室の出入り口まで畳を引っ張った。思った以上に畳は重たかった。かなり力が必要だった。

鼠が息を切らせながら、出入り口まで畳を引きずっている間に、白いねずみは店長のデスクの椅子の上に冊子を広げ、

「海月のところだから、だいたい五・四から五・七ガロアの角度で三十ネイピアで打ち出すか」などとぶつぶつと言っている。

鼠が畳を出入り口まで運ぶと、白いねずみは、自分の背丈ほどもある大きな木槌を担いで畳の脇に立ち、自分の尻尾を畳の端に空いている丸い穴に結びつけた。

「それじゃあ、行くぞ。ドア開けろ」

そう言うと木槌を野球の外国人バッターみたいに大きく振りかぶった。鼠は慌てて、言われた通りに休憩室のドアを開ける。ドアの向こうには真っ暗な夜が広がっている。人影どころか、電気の光らしいものすら見えない。遠くに星が光って見えるだけだった。鼠は急に自分の体が浮かぶような感じがした。

白いねずみが木槌で畳にくっついている赤い箱を勢い良く叩くと轟音が鳴り、畳は真っ暗な夜の中へと滑り出した。白いねずみは、先ほど尻尾を結びつけておいたおかげで、畳の後ろに尻尾でぶらさがるようについて来る。鼠には、轟音が低く太い音のように聞こえたが、畳が滑り出し

てから考え直すと高い透き通った音のようにも思えた。

畳はするすると真っ暗な夜の中を滑っていく。右も左も真っ暗闇。上を見ても、下を覗き込んでもやはり広がっているの夜の空。後ろを振り向くと銀河ピザの店がぽつんと黒の中に浮いている。だが、それもどんどん遠ざかる。

白いねずみは尻尾をたぐって、畳の上に座った。

「あの、店長なんですか」

鼠は白いねずみに聞いた。

「店長に決まってるだろ」

「井上店長なんですかね？」

「違うよ」

「どういうことなんですか？」

白いねずみは尻尾の結び目をほどきながら答える。

「説明したって分からないだろう」

「僕は夢の中にいると言うことで良いんですかね？」

「夢とは違う。夢は第三世界でも見られるだろう」

「第三世界？」

「そう、鼠がこれまで住んでいたのは第三世界なんだ。ここは第三世界じゃない。鼠の住んでいたのとは違う世界。夢は第三世界に住む人間が勝手に見る妄想。この世界はきちんと存在する世界。第四世界」

ねずみに鼠と呼ばれるのも妙な気がするが、質問を続けた。

「第四世界ですか？」

「そうだよ。さっきそう言っただろう」

「じゃあ、第一世界と第二世界もあるんですか？」

「あるよ。当たり前だろう」

「じゃあ、第五世界も？」

「ある」

白いねずみはほどけた尻尾を真っ直ぐ伸ばしながら答えた。

「自然数の範囲で世界は広がっているよ。マイナスや分数なんかは無い。理論的にはね。ただ、俺が知っているのは第四世界まで。第五世界より大きい自然数の世界は実際には知らないけど、理論上存在している」

「三分の五世界なんかは存在しないわけですね」

「だから、自然数しかないんだって。第一世界では軸は一本、第二世界では軸は二本。第三世界では三本、それぞれが直行するように入っている。四本入って、第四世界なんだ」

「空間の次元の数なんですか」

鼠は、どうして動物のねずみなんかに敬語を使っているんだろうと我ながら疑問に思いながらも、つつい井上店長の声に吊られて敬語を使ってしまう。白いねずみの喋り方は乱暴だが、

井上店長の声のせいか、鼠は親近感を感じる。

「次元じゃない。単に軸が何本あるかっていう話なんだ。おい、そろそろ目を閉じておけ、高重力波地帯に入るぞ」

「高重力波？」

「高重力波は眼球内のクリスタリンによく溶ける。高重力波が溶解したクリスタリンは上下を感じなくなるぞ。最悪の場合、目がブラックホールになっちまう。早く目をつむれ」

鼠はよく分からないままに目を閉じた。目を開いていても周りは暗いが星の明かりが方々に見えていて、何となく畳が飛んでいく進行方向が分かっていたのだが。目を閉じるといよいよ星の光も消え、畳がどちらに向かっているか分からなくなる。突然、体がずしりと重く感じられた。どんどん重くなる。いよいよ自分の体を支えられないんじゃないかと思った次の瞬間、重さが抜けて、白いねずみの声が出た。

「さあ、着くぞ。おい、早く目を開けろ」

目を開くとやはり暗い。しかし、今度の暗さは先ほどよりも深い気がする。さっきまで見えていた星の光も見えなくなっている。白いねずみは、先ほど出発の時に使った木槌にロープを結び下に投げ込んだ。下を除きこむと木槌は真っ暗な闇の中で静止した。

「ほら、ぼんやりしてないで手繰れ」

そう言って白いねずみはロープを鼠に渡した。鼠は分からないままにロープを手繰ると、畳と木槌の距離がどんどん近くなって行った。いよいよ木槌に手が届きそうなところで、白いねずみがぴょんと畳から飛び降りた。見えないだけで下にはきちんと地面があるらしい。木槌は地面の上に落ちただけらしい。

鼠は白いねずみになって、地面に下りた。暗いが、確かにこれまでの人生で踏みなれたのと同じような感覚の地面がある。少し固い感じがする。鼠はしっかりした地面というのが不思議と何だか嬉しくて、何回も地面を踏んで感触を楽しんでいると、突然、井上店長の声が、

「どうもお待たせしました」

と言った。白いねずみが言った声なのだが、鼠は普通のバイトのくせで、

「どうも、銀河ピザです。先に商品の方から渡させてください」

と続いた。お金より先に商品、つまり、ピザを渡すのが鼠が働いていた銀河ピザでの基本だった。先にお金をやりとりしていると、ピザを落とす可能性があるのも、さっさと客に渡してしまえ、渡してしまってから向こうが落としたりしてこちらの責任ではない、というマニュアルである。

はて、白いねずみが言葉を発した方向にはふわふわとした光が浮いている。大きさはバスケットボールほどで、お椀をひっくり返したような形をしている。下にふさふさと糸のようなものがついていて、全体が青色に光っている。しかし、次の瞬間には緑っぽい色に代わり、その次には黄色とゆっくりとグラデーションして行く。その光に照らされて地面がうっすらと見えた。煉瓦かタイルが敷き詰められているらしい。

「あれは、何ですか？」

「お客様の海月さんだ」

「海月がピザを食べるんですか？」

「食べる？ わけ分からんことを言うなよ。彼にはピザが必要なんだよ。とりあえず、お前はついて来い」

白いねずみが海月だと言った光は緩やかに上下しながら鼠の方へやってくる。

「今回はどういったピザでしょうか」

白いねずみは慣れたように接客していく。

「光が強過ぎて何も見えないんだヨ。自分の光で周りが何も見えないんだヨ」

「それでは光を抑えるピザでよろしいですかね」

「抑えてはいけないんだヨ。抑えたらオイラの光が減っちゃうんだヨ」

「それでは、どういたしましょうか」

「周りの光が強くて欲しいんだヨ。そうオイラと同じくらいの光があつて欲しいんだヨ。みんな暗くて見えないんだヨ。みんなのところに行くのダヨ」

「分かりました。それでは案内をお願いします」

白いねずみは、鼠の方を向いて、海月に聞こえないよう小声で指示する。

「赤い箱の中に保温バッグが入っているから、持ってきてくれ。できるだけ傾けないように気を付けてな」

鼠が言われた通り畳の後ろの赤い箱を開けると、第三世界の銀河ピザと全く同じボロっちい保温バッグがあった。傾けないよう抱えてみると、重さ、感触、共に第三世界のものと同じである。

白いねずみと鼠は海月についていく。しばらくすると、海月の仲間らしい光がふわふわと集まった明るい場所に出た。みんなそれぞれ違う色で光っているから、目がちかちかする。集まった光のおかげで周りのものが先ほどより分かる。綺麗に石畳が敷き詰められている広場みたいな場所らしい。綺麗な噴水らしきものも見える。それらは海月たちの様々な色の光に照らされ揺れている。

「それでは、みなさんがもう少し強く光れるようなピザを出しますが、よろしいですね」

「よろしく頼むのダヨ」

客の海月は言う。

白いねずみは鼠から保温バッグを受け取り、しばらく中を探るような手つきをして、何かさらさらした粉のようなものを取り出し、一面に撒いた。

さらさらした粉は海月達の光に反射して美しかったが、段々と見えなくなっていった。すると、注文した客である海月から小さな光の球が数個出て来て、別の海月たちに移って行った。それに合わせて注文した海月は少し暗くなり、代わりに近くにいた海月が明るくなった。

鼠は、そのやり取りを見ながら、この世界でのピザ屋さんというのは何か事件を解決する商売なのだ、と思った。しかし、先ほど、海月の言っていた「光を抑えてはいけないのダヨ」という言葉が気になった。抑えてはいけないけど、光を誰かに渡すのは良いのだろうか。

しかし、海月は鼠の考えていることなど気にしていない様子で、

「おお、見えるのダヨ。ありがとう、ありがとう」

そう言って、白いねずみに丸い黒い玉をいくつか渡し、畳があるところまで見送ってくれた。

「その丸い玉がこの世界での貨幣なんですか？」

鼠は海月に聞こえないよう、白いねずみにこっそり聞いた。

「貨幣？ 何だいそれは？ これは感謝だよ」

「感謝ですか？ お金はもらわないんですか？」

「お金？ 第三世界ではそういうものをもらうのか」

「だって、そうしないと生きていけないじゃないですか。飯が食えない」

「飯は食えるさ。ちゃんと感謝すれば食わせてもらえる。第三世界では違うのか？」

「そうですね、感謝しても、ごはんを食べさせてもらえるどころか、何もしてもらえないこともありますね」

「変な世界だな。一体何のためにみんな働いているんだ？」

話していると畳のところで着いた。

帰りは畳の後ろは叩かずに、後ろの箱の上に付いたスイッチを押すと畳はゆっくりと飛び始めた。

海月の姿が小さく見えなくなったところで、鼠は白いねずみに聞いてみた。

「あの、光を抑えちゃったように見えたんですけど、良かったんですか」

白いねずみは保温バッグを折りたたんで箱の中にしまいながら答えた。

「何かいけないのかい？」

「だって、お客さんの海月は抑えないようにって頼んでいませんでしたか？」

「ああ、とりあえず、高重力波地帯に入るから目をつむりながら話そうか」

鼠は急いで目を閉じた。体が重たくなってくる。

「良いか、あの海月達は光を吸ってしまうんだ。自分が光っていたいから。元々、あの世界にもちゃんと光はあった。普通に外の星の光も届いていた。だけど、どんどん吸収してしまうから、あそこの世界には光が無くなってしまったんだ。光が正常にあった頃は石畳の綺麗な世界だったらしいけどな。今じゃ、周りの星の光まで奪わないようにこうして高重力波地帯もあるわけさ。その拳句にやつらは、自分の光が眩しくって自分さえ見えないんだ。だから、時々、あんな感じの注文が入ってわけさ。少し光を別のところに移すと満足して感謝する。実際、周りが見えるようになって、あのお客さんは嬉しかったのさ」

「でも、注文の内容は無視しているってことになりませんか。光を抑えちゃいけないって言ったじゃないですか」

体の重さが解き放たれる。高重力波地帯が終わったらしい。目を開けると、星の光がきちんと見えて鼠は安心した。

「特に問題ないじゃないか、感謝しているんだから。ほら、こうして感謝ももらえたわけだし。ほら、お前も手伝ってくれたから一つやるよ」

白いねずみはそう言って、感謝の玉を一つ鼠に渡してやった。鼠が感謝の玉というのは正露丸みたいなものなんだな、やはり苦いのだろうか、と思って見詰めている内に、感謝の玉は鼠の掌へとゆっくりと溶け込んで行った。鼠は心の底から晴れやかな気持ちになった。

「確かに鼠の言う通り、俺は海月の注文を無視している。悪く言えば騙して感謝をもらったのかも知れない。だけど、騙すことがなぜ悪い。騙さずに海月たちに新しく外の光を持って行って与

えてやることだってできるけど、むしろそっちの方が悪いだろう。やつらは光を全て取ってしまったんだ。そこに都合良く、外の世界を持っていったりしていたら、そのうち全ての世界が真っ暗になっちゃう。騙すこと自体は悪いことじゃないんだ。もちろん、悪い騙しもある。つまり、海月からこっそり光を奪ってしまって、店に持って帰ってしまうとかだな。それは悪いことだ。俺達のしたことは宅配ピザ屋として正しいことだったんだよ。その証拠に感謝の玉が入った時、気分が良かっただろ。感謝の玉は実に公正平等なんだ。悪いことをして得た感謝の玉じゃ気分は良くなる。ほら、もうすぐ店だ。次の注文が来ているかな」

鼠の視界に、星空の中にぽかんと浮かぶ銀河ピザの店舗が見えてきた。

### 三、空気土竜の世界

店舗の休憩室に戻ると、白いねずみは、普段、井上店長が座っているようにデスクに向かった。鼠は白いねずみの指示で重たい畳を元の場所に戻させられる。重い畳を引きずりながら、休憩室の中を見渡す。簡単な仕切りに汚いカーテンのかかった更衣室、その中に吊られているみんなの制服、店長が車の雑誌を読むデスク、ピザの材料の入った白い棺桶のような冷蔵庫、それから机の上の灰皿に、畳。やはり見慣れた休憩室である。

ただ、違うのはドアを開ければ真っ暗闇に星が浮かんでいるという謎の世界、白いねずみの言葉で言えば第四世界ということ。何よりも井上店長の声で喋る腰ほどの大きさの白いねずみ。

白いねずみはデスクで紙飛行機を折り始めた。鼠は休憩時間だと思い、畳に寝転がった。いつもの畳の感触に笹野とよく転がっていたのを思い出す。しかし、ここは笹野と一緒に過ごしていた休憩室から随分遠くの場所なんだろうか、いや、笹野と転がっていたのは随分昔のことなんだろうか、今はいつなんだろう、分からない。畳の感触は実に良い。眠りを誘う。この畳が三輪バイクの代わりというわけか、妙なことだ、鼠は思う。

「おい、鼠、何やってんだ。チラシ折れよ」

井上店長の声で白いねずみが言う。

「すみません、休憩時間だと思ったので」

鼠は、紙飛行機を折って遊んでいる白いねずみに腹を立てながらも答えた。

「で、どこにチラシはあるんですかね？」

鼠のいた世界と同じなら、店長のデスクの向こうのダンボールにあるはずだ。しかし、この世界では一体、どんなチラシなんだろうか。鼠のいた世界みたいに食べ物のピザなら、表に時期別の一番売り出したいピザの写真、裏面にメニューの一覧という具合だが、この世界のピザではちょっと難しそうだ。お金をもらわないみたいなので、値段をどう書くかも気になる。

「さっきから俺が折ってるだろうが。隣に来て早く折れ」

白いねずみは、井上店長ののんびりした声で鋭く言う。鼠はよく分からないままに、白いねずみの隣に行く。白いねずみは、真っ赤な何も書かれていない紙でせっせと紙飛行機を折っている。それを真似て鼠も紙飛行機を折った。妙な感触の紙だった。固体のはずなのに、液体のような、それも粘度の低い、さらさらした触り心地である。

二人はせっせと紙飛行機を折っていく。五百機ほどの紙飛行機の山ができると、白いねずみは窓辺に行き、順番に投げていった。鼠も、それに倣って隣から紙飛行機を飛ばした。ふわふわと赤い紙飛行機が黒の夜空を滑っていく。

「ほお、角度、強さ、何より腕の振りが良いな、上手いもんだな」

しばらく投げていると白いねずみが言った。勿論、鼠は上手いも下手も分かりはしない。適当に投げているだけである。鼠は「ありがとうございます」と答えようとしたら、ふわふわと青の紙飛行機が鼠の投げる赤い飛行機とすれ違ってこちらに飛んできた。

「お、注文だな」

青い紙飛行機は窓から少しずれたところを飛んで行こうとした。白いねずみは尻尾を伸ばして上手く青い紙飛行機を捕まえ、開いた。

「おい、畳。すぐ出発できるようにしとけよ」

鼠はまた重い畳をずるずると出入り口のドアへと引き擦っていく。

鼠が、畳の上に乗る、白いねずみは尻尾を巻きつけ、木槌を振りかぶりながら言った。

「今度は空気土竜のところだ」

高いような低いような音とともに畳は夜を滑り出す。

赤い飛行機を時々追い越しながら畳は滑っていった。

「おい、鼠、今度はお前がやれよ」

白いねずみは言葉は鋭いが、やはり井上店長の声、穏やかである。一体、機嫌が良いのが悪いのか分かりにくい。

「え、何をするんですか」

「お客さんに商品を渡すんだよ」

「ピザですか」

「ピザ屋なんだから、ピザを渡す以外無いだろうが」

「でも、僕のいた世界とこの世界ではピザってというのが違ってまして、どう渡せば良いのか分からないんですよ」

「第三世界から来たやつってのは実に面倒で困るな」

白いねずみは腕組みしながら少し考えて、続けた。

「基本的に、第三世界と第四世界は全単射の写像で結ばれているんだよ」

「はあ、全単射ですか」

「そう、全単写。つまり、第三世界のものは全て第四世界の何かになるのさ。例えば、お前はこの第四世界でお前だろう。お前以外の何者でもないだろう。お前の世界のピザはこっちの世界のピザなわけだ。他にも優しさなり、ものなり、向こうの世界の何かは、何でもこっちの世界の何かになっているわけさ。こっちの世界とあっちの世界では一対一で全てのものが対応しているのさ」

鼠はどこかで聞いたことのある話だな、と思うのだが、よく思い出せない。今、白いねずみの言っているような話について鼠は一生懸命考えたことがあるような気がするのだが、それが何なのか、いつ考えたことなのか、どうにも分からない。考えているうちに周りがぼんやり白く光ってきた。

「おい、そろそろ耳をふさげ」

白いねずみが言う。

「また高重力波地帯ですか」鼠が聞く。

「今度は光子帯だ。フォトンベルト。鼓膜が上下左右ひっくり返るぞ」

慌てて鼠は耳をふさいだ。白い光はどんどん濃くなって、眩しさと同時に体が熱くて気持ちの良い温泉に入っているような感じがした。それから、また白い光は薄くなっていく。

今度の世界にはきちんと光があった。鼠が元いた世界の昼と同じくらい明るかった。

下を覗き込むと、見渡す限りの水田である。季節は秋らしく、黄金色の穂が一面を埋めている

。空には太陽もある。鼠は美しい田園風景に感動するより先に、自分にも見覚えのある、久し振りのまともな光景に安心した。

「さて、着いたな。降りるか」

鼠は木槌を田んぼの間の畦道目掛けて下ろした。

しばらく待ってみたが、海月の世界の時と違って客は来なかった。

「仕方ない、こっちから探しに行こう」

見渡す限りの黄金の稲穂の間に延びる畦道をてくてくと二人は歩いていく。

「ところで、僕は元の世界に戻れるんですかね」

鼠は思い出すかのように聞いた。実のところ、鼠はこの世界は自分の夢の中だと考え始めていたから、大して真面目でもない。

「そりゃ、帰れないかもしれないよ」

「そんな馬鹿な。僕が目を覚ませば帰れるに決まっているじゃないか」

「目を覚ます？ 目ならとっくに覚めているじゃないか」

白いねずみはきょろきょろと辺りを見回しながら歩いていく。客を探しているらしいのだが、白いねずみの背丈では見えるのは黄金色の稲穂だけであろう。

「さては、鼠、君は物事を都合よく捉えようとしているな」

白いねずみは続ける。

「良いかい、何度も言うけど、ここは第四世界なんだ。第四世界でも眠れば当然、夢を見る。第三世界の夢は第三世界の夢だし、第四世界の夢は第四世界の夢だ。夢は夢だよ。世界を移るのは違う。どうした、第三世界に戻りたくなかったのかい」

「まあ、どちらでも良いよ」

「君はまだここを夢の世界とでも思っているんだな」

「そんなことはないさ」

鼠は稲穂を一つ掴んでちぎってみた。実際のところ、鼠はこの世界を夢じゃないと信じ切っているわけじゃない。しかし、もし仮にこの世界が夢じゃない、本当の第四世界というやつにせよ、元の世界に帰るということを本気で望んでもいない。第三世界にせよ、第四世界にせよ、鼠はピザを運んでいるだけなのだ。別に戻ったところで、凄くありがたいことがあるわけでもない。この世界のピザ屋の仕事も慣れればきっと素敵なものだろう。

ちぎった稲穂を手の中でいじりながら、ふと笹野のことを思い出す。井上店長、松井、小田、大学の教授、両親。鼠は第三世界に帰りたいとは思えない。あの世界はあまりにうらぶれている。

「どうも、お待たせしました。銀河ピザです」

白いねずみが声を上げた。鼠は稲穂を道の脇にこっそりと捨てて、同じ挨拶をした。

三十センチ程の土竜が宙を浮かんでいた。

「おい、君、後ろの君だ。僕の巣穴を壊さないでくれたまえ」

土竜は鼠に向かって言う。

「大変申し訳ありません」白いねずみが謝り、鼠もそれに倣った。

しかし、巣穴を壊すと言っても、鼠の周りにはそれらしき穴は無い。

「そこだ、そこ。見えないのかね」

鼠には何のことだか分からない。

「空気土竜は空気を掘るんだ。恐らく、鼠のいるところが丁度彼の巣穴なんだよ」

白いねずみがこっそり鼠にだけ聞こえるよう教えてくれる。

それで、鼠は一步左に動こうとしたら、

「おい、お前、分からないのか、そこは駄目だってば」

また空気土竜に叱られた。

「馬鹿、お前、俺の後ろついて来い」

白いねずみはそう言って、そっと空中に足をかけた。何も無いはずの空中に階段があるように白いねずみは登り始めた。鼠は困る。やけくそで白いねずみの真似をしたら、何かに足が付いた。もう一步足を踏み出すと鼠の体は宙を浮く形になった。柔らかい土の感触が坂のように続いている。

「どうもお待たせして申し訳ありません、どのようなピザがよろしいでしょうか」

白いねずみは土竜に聞いた。

「うん、ちょっとついて来てくれ」

空気土竜はずいずいと空気の巣を進んでいき、鼠と白いねずみはその後をついて行った。

「店長、僕には巣穴なんて見えないんですけど、どうやったら見えるんですか」

鼠はこっそりと白いねずみに聞いた。

「俺にも見えないさ」

「でも、店長はさっきから上手く巣穴っていうやつの上を歩いているじゃないですか」

「そりゃ、目で見てるんじゃない。暗黙の合意というやつさ」

「暗黙の合意？」

「確かに俺には巣穴は見えていない。しかし、土竜は間違いなく巣穴はあると言い張っている。そして、その巣穴に住んでいる。彼が巣穴だと認識しているところに巣穴があるんだ。つまり、巣穴が見えなくても、彼が巣穴だと認識しているところが分かれば良いわけだ。だから、俺は土竜の心を捕まえているんだ。そうすれば、俺の歩くところにも上手く巣穴ができるというわけさ。暗黙の合意なんだ」

「どういうことですか」鼠は本心からこいつら頭がおかしいんじゃないのか、と思った。

「だから、暗黙の合意なんだってば。俺とあいつの中で巣穴だと思えば巣穴なんだ」

鼠はよく分からないままに後ろをついて行った。てくてくと稲穂の上の登ったり下ったりの空気の坂道を歩いていく。

向こうにもう一匹土竜が見えた。やはり、空を浮いている。前を歩いていた土竜はぐるりこちらを向いた。

「あっちの土竜に会いたいんだが、困ったことにこの間に空盤があって掘り進めないんだよ。何とかなるピザあるかい」

白いねずみは鼠の方を向いて、目配せした。やれということなのだろう。

「はい、大丈夫ですよ。少々、お待ち下さい」

鼠は、海月に対して白いねずみがやったように保温バッグの中を探ってみた。きっと光る粉があるに違いないのだ。それを撒けば上手く行く。しかし、保温バッグの中は空で何も無い。ま

さか、白いねずみめ、ピザ、つまりあの粉を入れ忘れたんじゃないだろうか、鼠はそう思って白いねずみの方を見るが、白いねずみは、我関せずといった顔をしている。

土竜は苛立たしそうに鼠の方を睨む。鼠は困ったことだと焦り始めた。

次の瞬間に鼠の足元が突然抜けた。空中の巣穴が急に無くなる、つまり突然に足元の地面が消えたわけだ。幸い、下に上手く稲穂が積み上げられていたおかげで、鼠は怪我もしなかった。

「申し訳ありません、彼、研修中なもので」

白いねずみはそう言って土竜に頭を下げた。

「このピザは少し時間がかかりそうですが、大丈夫ですかね」

「できるだけ早く頼むよ。それじゃあ、俺は寢床で待っているから、ピザができる頃にまた呼んでくれ」

空気土竜はそう言って、どこかへ言ってしまった。

白いねずみがするすると尻尾を鼠の目の前まで下ろしてくれた。

「おい、捕まって登って来い」

鼠はわけも分からないまま、鼠の尻尾に捕まった。するすると尻尾が手繰られ、元の巣穴の高さまで来た。便利な尻尾である。

「お前、適当に保温バッグの中を探ただろう。そういうことをすると、世界が壊れるんだよ。特に暗黙の合意なんてのは、適当な気持ちになっちまったら終わりなんだ。だから巣穴が抜けたんだ」

「店長も海月のとき、適当にやってたじゃないですか」

「適当なわけあるか。適当にやってピザができるなら、みんな保温バッグだけ買って、わざわざ宅配の注文なんてしないだろうが。相手の心を考えるってのがピザ屋だ。しっかりイメージしろ。相手の心をきちんとイメージできて、初めてピザができるんだよ」

鼠は尻尾を離して巣穴に立とうとするが、また抜けそうで怖くて、なかなか尻尾から離れられない。

「良いか、鼠、大丈夫だ。そこにはきちんと巣穴がある。ほら、見ろ」

白いねずみがとんとんと小さくジャンプして見せた。不思議と安心するような心持になり、鼠は思い切って手を離してみた。上手く巣穴に立てた。

巣穴に立てたままでは良いが、一体、ピザを作るというのが、ますます分からなくなってしまって、また困る。

「良いか、あの土竜がどうしたいのかを考えれば良いんだ。あの土竜は向こうの土竜に会いたくだけなんだ。そんなに難しいことじゃないだろう」

白いねずみはそう言うのだが、鼠にはどうすれば良いのやらさっぱり分からない。

「良いか、暗黙の合意なんだ。実際、お前は合意を破ったから、底が抜けて落ちた。同じようにして向こうにいけるようにすれば良いのさ。まあ、ついて来い」

白いねずみは、向こうの土竜の方に行こうとしたが、すぐにごつんと何かに当たった。

「これが空盤、つまり壁ってわけさ。とにかく、この空盤沿いに歩いて行ってみよう」

鼠と白いねずみは空盤という固い壁を掌で確かめながら歩いて行った。空盤の向こう側にいた

土竜が見えなくなった。

「さて、そろそろ良いだろう」白いねずみは立ち止まって言った。「どうだ、この辺の壁は柔らかいような感じがしないか」

鼠は触ってみると確かに柔らかい感じがする。

「空盤の途切れ目ってやつだ。さあ、ここを掘って、向こう側の巣穴につなげちまおう」

二人はせっせと手で空気を搔いて、空気を掘っていった。空気は柔らかく、綿菓子のように簡単に掘れた。鼠には掘った後の空気の屑がぼろぼろと下の稲穂に降っていくような気さえした。すぐに向こう側についた。

空盤の向こう側を元来た方に、歩いていくと土竜がいた。

「空盤の向こうの土竜が君に会いたいそうですよ」

鼠がそう言うと、土竜は頷いて、二人の後ろについてきた。

「でも、空盤はとても固いし、どこまでも続いているから無理ですよ」

土竜は言う。白いねずみはそそくさと先を歩く。

先ほどの空盤の柔らかいところまで着くと白いねずみは言った。

「ええ、偶然ですけどね、歩いていると、ここが柔らかいのを見つけて試しに掘ったら空盤を抜けられたんですよ」

白いねずみは空盤に開いた穴のあたりを尻尾で示した。土竜は、少し黙っていたが、手を伸ばすと、

「ああ、なるほど本当ですね」

と言い、三人は空盤を横切った。元いた場所まで戻って来ると最初の土竜が待っていた。

「やあ、どうもありがとう。助かったよ」

そう言うと、海月がくれたのと同じように感謝の玉を鼠に手渡した。二匹の土竜は仲良さそうにどこかへ歩いて行った。

鼠は白いねずみに感謝の玉を渡した。白いねずみは半分を鼠にやった。感謝の玉はするすると鼠の掌に溶けて行った。

「別に、保温バッグを使わなくても良いんですね」

鼠は聞いた。

「そりゃ、ピザさえ相手に渡せれば何でもいいさ。俺たちは宅配ピザ屋だぜ」

「やっぱり適当なんですね」

鼠がそう言った瞬間、空気の巣穴の足元が抜けた。白いねずみが素早く尻尾で鼠を助けた。下には深い井戸の口が開いていた。先ほどと違い落ちれば無事には済まなかっただろう。

「適当じゃないさ。俺たちは大真面目にやっている」白いねずみが言う。

「だって、思い込めば歩ける空気に、相手のいないところでは簡単に崩れる空盤、適当じゃないですか」

「じゃあ、俺がこの尻尾をお前から離したって大丈夫なんだな。お前は適当に助かるんだろ」

実際、鼠には助かる気がした。井戸の口に何ぞ柔らかな地面でも想像すれば良いだろうと思った。白いねずみは言った。

「お前の考えていることはだいたい分かる。適当に地面を思い描けば井戸に落ちることもないな

んてところだろう。だけど、無駄さ。お前と俺の間にそんな暗黙の了解は無い。何なら試してみたって良い。ただ、第四世界の死は、第三世界の死の写像だ。意味は分かるだろ」

鼠は白いねずみに対して腹が立った。何も言わずに白いねずみを睨みつけた。白いねずみも何も言わずに睨み返した。

しばらくお互いに何も言わなかったが、ふと鼠の下に地面の感触がした。白いねずみは尻尾を離し、先に行った。鼠は後を追いかけた。空気の巣穴は元に戻っていた。

「お前の言うことも分かるさ」

鼠が白いねずみに追いつくと、白いねずみは言った。

「暗黙の了解なんてのは確かに一種適当な要素も含む。だけれど、決して適当なわけじゃないんだ。俺たちが生きて行くには、或る程度必要なものなんだ」

鼠と白いねずみは、そのまま空気の巣穴を歩いて畳の元まで戻り、空気土竜の世界を後にした。

二人は耳を押さえながらフォトンウェーブを抜けて、店へ戻った。途中、鼠は白いねずみに聞いた。

「行きは木槌なのに、どうして帰りは何も無しで戻って行けるんですか？」

「そりゃ、お前、この宅配ボックスの中に入っている電磁石のおかげさ」

白いねずみはたたみの後ろ側についた、赤い箱を軽く叩きながら行った。確かに、宅配ボックスの中で何かモーター音のようなものが聞こえる気がした。

「店にある磁石に反応する電磁石を載せているから、帰りは簡単に戻れるってわけさ。配達先に磁石を置くわけにもいかないから、行きは木槌で行くしかないんだけどな」

畳は真っ暗な夜の中を飛んでいく。

「で、鼠、第三世界に戻りたくないみたいなことを言ってたけど、良かったらこのピザ屋で就職するか？」

藪から棒に白いねずみは聞いてきた。

「どうしてですか？」

「いや、別に。何となくさ。だって、戻りたくないんだろ？」

「いや、戻りたくないってわけじゃないですけど」

白いねずみの提案は鼠にとってあながち悪いものじゃなかった。

この世界でのピザ屋には何か生きがいのようなものが感じられた。白いねずみと二人で赤い紙飛行機を投げては、畳でいろんな世界に行って、事件を解決するのも悪くない。金の心配をしなくて良いというのも良かった。この世界では、全てが金以外のことのために回っている。

それでも、鼠には何かひっかるものがある。

銀河ピザの建物が見え、丁度、青い紙飛行機が窓辺に飛んできているところだった。

#### 四、自殺し続ける猫の世界

店に着くと、白いねずみは尻尾をひょいと伸ばして、青い紙飛行機を取った。すぐに次の配達である。鼠が元いた世界ではご飯時が忙しかったが、この世界のピザ屋ではどの時間が一番忙しいのだろうか。

鼠は畳の上で準備をして待ち構えているのだが、白いねずみはなかなか出発しようとしな

「店长、どうしたんですか？ 早く出発しましょうよ」

「うん、分かっている急ごう。そう、宅配ピザ屋では時間こそ全てだ。そう、時間こそ。そうだ、お前、一人で行って来い」

白いねずみは落ち着き無く言った。

「いえ、困りますよ。僕まだよく分かってないんですから。重力波みたいな危険なところとかも分かってませんし」

「大丈夫、次のところは安全だし、多分、さほど難しくもない。駄目なら電話して来い」

そう言って、白いねずみは汚いカーテンをめくって更衣室に行き、適当に靴を一足取って、片方を鼠に渡した。

「靴じゃないですか」

「左右対称なものなら、電話として使えるんだよ」

鼠はもうこの世界での妙な法則には驚かなかった。何にせよ、靴でも何でも連絡が取れるものがあるなら何とかなるだろう。

よく見ると靴は笹野の物だった。別に悪いことをしているわけじゃないが、女の靴を握り締めて安心しているというのはどうも危ないところがある。

「それじゃ、行ってらっしゃい」

白いねずみが木槌を大きく振りかぶって言った。

「安全運転で行ってきます」

鼠が言い終わらないうちに、木槌は轟音響かせ、畳は出発した。

つつつと夜を滑っていっていると、靴から井上店長の声がしてきた。

「おーい、順調か」

「多分、順調です。ところで、お客さんって誰なんですか？」

笹野の靴に口を近づけ、返事する。我ながら実に変態的だと鼠は思った。意外とくさくない。笹野のにおいがする。笹野のにおいと言っても女の子のにおいというよりは、ピザ屋の油っぽいにおいだ。だが、確かにそれは、元の世界にいた頃の、畳で隣に寝ていた女の子のにおい。しかし、その畳も今は夜空の中を滑っていている。

「宅配ボックスの中に伝票が入っているから、自分で見ろ」

ぷつんと音がして、電話、いや靴は途切れてしまったらしい。

宅配ボックスの中を開けると、見慣れた伝票が入っている。客の名前の欄には『自殺猫様』と書かれている。なるほど、白いねずみが行きたがらないわけだ、と鼠は納得した。客といえど、猫の元へ行くのは本能として怖いのだろう。鼠の元いた世界でも、井上店長は怖い客や、治安の悪いところの宅配はバイトに振って逃げていたのを思い出す。バイトの中には店長のそういうと

ころに腹を立てるものもいたが、鼠はむしろ店長らしくて好きだった。白いねずみにも同じような親近感を覚えた。

住所の文字は何語だか分からないが、鼠にはさっぱり読めない。商品名にはピザとしか書かれていなかった。

猫の世界には太陽は無かった。空はぼんやりとした赤茶色のような妙な色をしていた。鼠は木槌を忘れたので、畳が速度を失ってどこか地面に止まるまでぼんやりと世界を眺めて過ごした。きれいな芝が一面を覆った世界で、時々、思い出したように家が四、五件集まって建っている。どの家にも風車が付いているのだが、風など吹かないらしく、全く回る気配はない。のどかな景色だった。ただ、人はいない。猫も見当らない。

同じような景色を繰り返して、畳は一軒の風車小屋の隣に着陸した。古い木造の小屋の上に風車が付いている。

鼠は期待を込めて、風車小屋の扉を叩いた。しかし、期待虚しく、小屋の扉は開かれなかった。ノックも返ってこなかった。鼠は少し寂しくなっていた。この世界に来てから人間と言うものに出会っていない。風車小屋という人間が住んでいそうな建物に、鼠が期待を持ったのも無理はない。

代わりに風車小屋の影から、白、黒、金の毛を持つ三毛猫がこちらを覗いているのに気付いた。

「どうも、お待たせしました銀河ピザです」

鼠は三毛猫に向かって言った。しかし、三毛猫はきょとんとしていて、何も返事しない。鼠は人違い、いや、猫違いをしたと思って、急に恥ずかしくなってきた。確かに、客は猫と書いてあるものの、どの猫なんだか分かってはいないのに声を掛けたわけだ。

「すみませんでした。間違えました」

そう言って、走り去ろうとする鼠を後ろから三毛猫が呼び止めた。

「いえ、合ってるわよ。初めての注文だったから、ちょっとぼんやりしちゃってたの。ピザを頼みたいんだけど」

「どうも、すみません」

鼠はもう一度謝ると、接客に戻った。第三世界と第四世界の違いはあれど、鼠も大学時代をピザの宅配で過ごした男である。接客は慣れたものである。

「どのようなピザがよろしいでしょうか」

「そうね、何とも言えない問題だと思うのよ。何にせよ、問題を見てもらうところから初めましょう」

三毛猫は尻尾を立てて歩き始めた。鼠はいそいそと宅配ボックスから使い方もよく分かっていない保温バッグを取り出し、ついていく。

のっぺりした赤茶色の空には遠近感が無い。時々、平面の魚が端から飛んでくる。ぱらぱら漫画のように少しずつ進む。ここは第四世界、鼠も妙なことには慣れた。しかし、遠近感の無い空に平面の魚が飛んでくるのだから、近くを飛んでいるのか、遠くを飛んでいるのだから分からない

。あの魚が毒の牙を持っていて、突然に噛み付いて来たらひとたまりもないだろう、いや、もしかするとあの魚を猫たちは食べて生活しているのかもしれない、それなら毒を持っていないだろう、いや、ここは第四世界、牙にだけ毒を持っているかもしれないし、第三世界の河豚の調理免許みたいなものを持った猫がいてもおかしくはない。そんなことを考えながら鼠は三毛猫の後ろを歩くのだが、三毛猫の尻尾が左右に揺れるたびに、急に後ろからこの三毛猫を抱きしめて泣きたくなるような妙な感情が心に浮かぶ。草原の中を猫と鼠は歩く。時々、回ることの無い風車小屋が建っていて、魚がちらほら浮いて、猫がその間を走るのが見える。段々と猫が増えて魚が減ってくる。

「もうすぐよ」

三毛猫は尻尾を揺らして言った。もうすぐと言っても、鼠には特に何が変わったとも思わない。相変わらず空はのっぺりした赤茶色で昼も夜も分からない。

三毛猫は小さな丘の前の木の下で立ち止まった。

「この先の丘の上に行ってみて。足元にはくれぐれも気を付けて」

三毛猫は木の下で足を伸ばし、横になった。仕方が無いので、鼠は一人で丘に登ることにした。緑の小さな丘である。傾斜もさほど厳しくはない。五分とかからず鼠は頂上に着く。

頂上にはぽっかりと直径二十メートルほどの穴が開いていた。穴はどこまで続くか分からないほど深くて、鼠がこれまで見たことがないほど暗い色をしていた。海月の世界よりも暗いように思われた。穴を覗き込むと、温かな風が吹き上げた。気持ちの良い風だと鼠は感じた。鼠はしばらく暗く深い穴を眺めてから、三毛猫の元へ戻った。

「穴があるだけでしたよ」

「そう、穴があるだけ。この世界のオス猫たちは、交尾を終えると、みんなあの穴に落ちて行くの」

「あの穴はどこに続いているんですか？」

「わたしは行ったことは無いから分からないわ」

三毛猫はまた歩き出し、鼠はその後ろをついて行った。

「でも、今まで暮らしていたこの世界からいなくなっちゃうってことなんだから、私たち残った猫からすれば、死ぬのと同じよ」

「実際には死んでいないんですか」

「実際に死ぬって」

鼠は少し考えてから言った。

「つまり、あの穴はとても深くて、落ちたら何か固い地面でもあってぐちゃぐちゃになって死んじゃうってことじゃないですかね、つまり、落ちて行った猫たちはもう二度と動かなくなるってことですかね」

「さあ、動いているかもしれないし、どこか別の世界につながっているのかもしれない。とにかくわたしは落ちたことがないから分からない。落ちたことのないわたしにとって、彼らは死んだと同じ。ただ、みんな伝説に従って落ちていくのよ」

「伝説？」

「昔、この世界にはたくさんのオス猫とたった一匹のメス猫がいたの。メス猫は病気にかかって

いた。メス猫が死んだら、この猫一族は絶滅。そこで、占いをして、どうすれば良いか決めることになったの。魚の骨を焼いて、そのひび割れ方を見て、シャーマンの猫が予言を出す。何せ、大昔の伝説だから、今考えれば妙な話だけど、きっとその時の猫たちは本気だったに違いないわ。それで、シャーマンの猫が言うには、あの穴に飛び込めば、落ちた猫の残りの寿命がメス猫の病気を治すだろう、っていうわけ」

「それが今でも続いているの」

「さあ、実際はどうだか知らないけど、穴にオス猫が飛び込む理由って言ったらこのくらいしか無いもの」

三毛猫は一軒の風車小屋に入った。小屋には誰もいなくて、白い清潔なシーツが掛かったベッドが一つだけある。三毛猫はベッドの上に自分の身を投げるように転がった。三毛猫が寝返りを打つと、白いシーツに三毛猫の金色の毛が付いた。

「ねえ、あなた、死ぬっていうことについてどう思う」

「どう思うっていうと、どういう意味ですか」

鼠は面倒な質問だと思った。鼠は数字で処理できないことを考えるのは好きじゃない。白いねずみにしてもそうだが、この世界の連中は数字で処理できないような問題ばかり持ち出したがる。

「どういう意味でって、どういう意味で」

三毛猫は返す。心なしか三毛猫の声は楽しそうである。

「まず、誰が死ぬのか。僕が死ぬのか、あなたが死ぬのか、それとも他の誰かが死ぬのか」

「じゃあ、君で良いよ。君が死ぬことについてどう思う」

「まだ若いし、死ぬには早いと思いますよ」

「良くないってことね」

「そりゃ、死ぬってことは良いことではないでしょう」

「じゃあ、ネズミだったら。今、屋根裏でどこかの猫が捕まえた、とあるネズミ君が今死のうとしている。これは良くないこと？」

鼠は少しばかり複雑な気がした。ねずみと聞いて、よもや自分を想像はしないにせよ、白いねずみのことが浮かんだのだった。しかし、相手は客である。鼠は落ち着いて答えた。

「そんなに悪いことじゃないと思いますよ。だって、食べるためでしょう」

「そう、きっと食べるためね。わたしたちもお腹が減るもの。じゃあ、良いことかしら」

「いえ、殺すっていうこと自体はあまり良いことじゃないですよ」

「殺すのは悪いことだわ。わたしが聞いているのは、そのネズミ君が死ぬということに関して良いことか悪いことか」

鼠は少し悩んだ。改めて面倒な質問だと思った。

「申し訳ないですが、ネズミになったことが無いので分かりません」

「君はねずみなのに？ わたし、凄くお腹が減っているのよ」

三毛猫はからからと笑った。

鼠は逃げ出そうとした。自分でもなぜか分からないが、恐怖を感じた。しかし、風車小屋の扉が開かない。蹴破ろうとするが、木製に見える扉は石のように固い。必死に逃げようとドアノブ

に手をかける。鼠が慌てるのを見て、猫はゴロゴロと喉を鳴らして笑った。

「大丈夫、ピザ屋さんのねずみを食べるほど野暮じゃないわ」

鼠はそれでもドアノブを話さない。三毛猫は笑いを止めて、続けた。

「そう、生き物はみんな死にたくないのよ。君が今、一生懸命逃げようとしたみたいに。そう、死ぬのは悪いことよ。嘘を吐いては、良いピザ屋さんにはなれないわよ。ピザ屋さんは正直でなくちゃいけないわ」

そう言うと、三毛猫は尻尾を振ってみせた。鼠の心から恐怖がなくなり、妙な気持ちが生じる。

気付くと鼠は、三毛猫の隣に寝転がっていた。鼠は三毛猫の金色の毛の辺りを撫でながら聞いた。

「それで、ピザはどうですかね？ オス猫たちが死ぬのを止めればよろしいですか？」

鼠は自分で言いながら、難しい注文だと思った。

「それは難しいでしょ。オス猫たちがどうして死んでいくのか納得できれば良いわ」

三毛猫は喉を鳴らしながら答えた。

鼠は三毛猫をしばらく撫でていた。三毛猫が眠っても撫でていた。いつまで撫でていても飽きないだろうと思われた。

「おい、調子はどうだ」

井上店長の声が保温バッグからした。保温バッグに入れていた笹野の靴からする白いねずみの声である。

鼠は三毛猫が起きないように急いで、小屋から出て、電話、いや、靴に出た。

「どうも、何だか難しい注文なんですけど」

笹野の靴に向かって鼠は喋る。

「そりゃ、ピザを配達するっていうのは難しいことさ」

「どうすれば良いんですかね」

「お前がすべきだと思うようにしてみたら良いじゃないか」

「また、難しいことを」

「そう、ピザを運ぶっていうのは難しいことなんだ。でも、お前はピザ屋だから大丈夫。ピザ屋が一生懸命真面目にやればピザは届く。そんなもんだ」

そこで通話は切れてしまった。

鼠はよく分からないままに、とりあえず穴のある丘へ行ってみた。さっき三毛猫が体を横たえていた木の下に座り、丘に来る、落ちていけようオス猫を待ってみた。

一匹目の猫は黒猫だった。鼠が声をかけると、にゃー、と返事した。

「これから穴に落ちるのかい？」

この質問にも、にゃー、としか答えない。

鼠はこの黒猫について行った。途中、何を聞いても黒猫は、にゃー、としか答えない。

「どうして死んでしまうの」

「にゃー」

黒猫は落ちて行った。

鼠はまた木の下まで戻って行くと、次の猫がやって来た。今度のは茶色の猫だった。

「こんにちは」

今度のは茶色の猫の方から声をかけてきた。鼠は、こんにちは、と返そうとしたのだが、代わりに喉の奥から出てきたのは、にゃー、という声だった。せつかくの喋れる猫だから何か聞けるかもしれないのに、鼠は、にゃー、以外何も言えない。茶色の猫は、

「今日は天気も良いですし、魚が真っ直ぐに飛んでいますな」

「こう見えても、昔は非常に頭が悪かったんですよ。成績なんて、いつも二ばかりで、母親に叱られたものです」

「ミルクにチーズ、今日の朝食は実に立派なものでしたよ。まあ、普通の猫にとっては普通の朝食かもしれませんがね、うちは裕福とは言いがたい家だったもので、朝食なんてのはいつも質素に蓄えてある干し魚ばかりですからね。今はさほど貧乏もしていないんですが、昔からの習慣で、朝食は大抵質素なものなんです。きっと昨夜の集会の時にでも何か朝食の話題にでもなったんでしょうな」

などと、他愛も無いことをぼつぼつと呟くのだが、鼠は、にゃー、としか答えられない。肝心の穴に落ちることについては何も言わない。しかし、足取りは真っ直ぐに頂上の穴へ向けて、緩やかな傾斜を確実に登っていく。

にゃー、としか言えない鼠は不意に自分が穴の中に落ちていくことを考えた。さっきの猫が、にゃー、とだけ言って穴に落ちていったのを思い出したのだ。しかし、思い出してみると、穴に落ちるといふより、穴に向けて入って行ったようにも思える。温かな深い闇に向けて身を預ける。鼠は存外悪くないような気もした。

「新型のネズミ捕りを作れば、もっと食は豊かになると思うんですがねえ」

喋る猫は、やはり一人で何か無意味なことを呟き、鼠は、にゃー、とばかり答えながら歩いた。

穴のところまで来ると、鼠の足は自然と手前で止まった。喋る猫は、急に無口になって静かに穴に落ちて行った。

鼠はぼんやりと穴の前で膝を抱えて座り、次の猫を待った。

どのくらい時間が経ったか分からないが、数匹の猫たちが穴に吸い込まれて行った。ある猫は、にゃー、と言ひ、ある猫は無言だった。何か言葉を喋りながら落ちていく猫というのはいなかった。にゃー、という猫もやかましく鳴くのではなく、一言挨拶でも交わすように、静かに、にゃー、と言う。別に鼠に挨拶をしているわけではない。彼らは穴の向こうの何者かに挨拶をするようだった。

鼠は座って待つばかりではいけないと思い、時には丘の下まで降りて話し掛けようとしたが、猫は、にゃー、と言うか、喋ったと思ったら、今度のは鼠が、にゃー、だ。

魚が空を二十回真っ直ぐ空を横切った頃に、後ろから声がした。

「ピザの調子はどう？」

鼠が振り返ると、例の三毛猫が尻尾を伸ばして座っていた。

「どうも、難しいですよ。彼らに直接聞いてみようと思ったんですけど、誰も穴に落ちることに

ついては何も話してはくれない。話してくれそうな猫に話しかけると、なぜだか僕が、にゃー、としか鳴けなくなってしまう」

「それで、あなた自身はどう」

「僕自身？」

「あなた自身が穴に落ちることについて」

「そりゃ、落ちたくないですよ。穴の向こうに何があるんだか分からないんだし。でも、不思議と穴の向こうには温かな何かがあるような気がします」

「温かな何か？」

「上手くは言えないんですけど、落ちていく猫たちを見ていると悪い気はしないんですよ。彼らが下りて行く穴の先に冷たい悲しいものがあるようには思えないんです。実際のところ、死なのかもかもしれませんが、それでも、何か温かなものを感じますよ」

「死は場合によっては良いこと、っていうこと？」

「いや、死は悪いことでしょう。だって、今でも僕は落ちたくないですもの」

三毛猫は少し考えてから言った。

「わたしと交尾したら、あなたも穴に落ちたくなるのかしら」

鼠は三毛猫との交尾について考えてみた。先ほどの三毛の手触り、ぬくもりを思い出すと悪くない気もした。

「いや、僕は猫とは交尾はできませんし、できたとしても、やる気は無いです。何とも言えませんね」

「仮にの話よ」

三毛猫は尻尾を振って言った。鼠の頭の中が晴れやかに透き通るような風が吹いた。

「仮にしたとしても落ちないですよ。僕は猫じゃないですからね。仮に猫だったら、どうですかね、分かりませんね。だって、猫になるなんていう仮定はどんなことがあっても成立しませんから。でも、ある世界では、交尾をすると穴に落ちていく猫たちがいて、落ちるべき穴がある。この事実に関して否定すべきところはないように僕は思いますけどね」

三毛猫はしばらく考える風だったが、ぴたりと尻尾を振るのを止めて溜息を付いた。

「あなたって、身も蓋も無いことを言うのね。でも、良いわ。素敵な答えだと思う」

そう言って、三毛猫は肉球の間から感謝の玉を取り出し、鼠に渡した。

にゃー。

一匹のオス猫が、三毛猫と鼠の横で穴の底へと降って行った。

三毛猫は鼠を元の畳の場所まで送ってくれた。

「そういえば、あなたお腹は減ってないの？ 干し魚でも食べる？」

畳に乗ったところで、三毛猫が鼠に聞いた。不思議と鼠の腹は減っていなかった。鼠はこの不思議な世界に来てから、眠気も空腹も感じていないことに気付いた。それでも、体のどこに異変があるわけでもない。鼠は三毛猫の出してくれる干し魚を食べたいとも思ったが、丁寧に断って、畳の後ろの宅配ボックスの電磁石のスイッチを入れた。

「もしも、穴に落ちたいと思ったらいつでもここにいらっしやい」

三毛猫は優しく鼠を送り出してくれた。

鼠は三毛猫が見えなくなって、改めて良い猫だったな、と思った。

## 五、 白いねずみのドッペルゲンゲルの世界

「さあ、すぐに出発だ」

鼠が店に着いた途端に白いねずみは言った。

「とにかく時間が無い、急ごう」

井上店長の声で白いねずみは続ける。鼠も随分と白いねずみの発する井上店長の声には慣れていた。井上店長ののんびりした声で乱暴な調子で喋る、始めは変な気もしたが、おかしくない気もした。口調は乱暴でもやはり穏やかだった。ただ、急ぐ井上店長の声というのは、どうも鼠にはしっくり来なかった。

鼠は急かされるままに、出発できるように畳の向きを変えた。

白いねずみの木槌が轟音上げて、また畳は滑り出す。

「猫のところの宅配が遅くなってしまって、すみません」

「いや、それは良いんだ。宅配の時間は急ぐべきだけど、何よりも商品が届かないと意味がないから、時間がかかっても確実に届ければ問題は無いんだ。ただ、急がなくちゃいけない」

畳はいつもより速く滑っていることに鼠は気付いた。星が糸を引いているように見える。鼠はどこかそわそわとしている。

「ところで、お前、どうすることにした。銀河ピザ就職するか。正社員で迎えるぜ」

白いねずみは聞いてきた。

「僕が正社員になったら店長はどうするんですか」

鼠は白いねずみとの暮らしを気に入りはじめていた。白いねずみと一緒にこの世界でピザを運ぶのも悪くはないと。

「オレはそうだな、どうするかな」

白いねずみはしばらく考えている風だった。鼠は白いねずみと一緒にじゃないなら、あんな寂しい闇の中に浮かぶピザ屋で仕事をするのは嫌だった。

「でも、お前は第三世界に帰るからな。そう、お前は帰るんだ。だから、急がなくちゃいけないのさ。さ、そろそろ目をつむれ」

鼠は白いねずみの言う通りに目を閉じた。目を閉じると、畳が急に加速したように感じて、鼠は目が回り始めた。

鼠が目を開くと、畳は線路の上に墜落していた。白いねずみの姿はどこにもない。白いねずみが途中で墜落したり事故に遭うというのは鼠には考えられなかった。白いねずみは失敗しない。それは鼠の思い込みに過ぎないのかもしれない。しかし、鼠にとって白いねずみとはこの世界で絶対的な存在だった。失敗など有り得ない。かと言って、何かに成功しているとも思わない。白いねずみには失敗も成功も無い。鼠はそう思った。目が回っている間に先に配達に行ってしまったのだろうか。

線路の向こうに黒い煙が見え、レールが揺れる音がし、段々と鼠の方へと近付いてきた。鼠は畳を線路から引き擦った。いつもより重たくなっている気がして、なかなか作業は進まなかった。畳がレールの角に引っ掛かって抜けない。その間にもレールの揺れる音は大きくなり、黒い煙

の下に、黒い機関車が見え、あっという間に鼠の前までやってきた。長い機関車だった、一体どこまで続いているのか、鼠から見えないところまで車両は伸びている。畳が壊れれば鼠は二度と店には戻れないだろう。白いねずみは一体どこに行ったのだろう。彼さえいてくれれば何とかするのに。機関車は速力を落とさず鼠と畳目掛けてやってくる。

「おい、ストップストップ」

機関車が、あと二十メートルまで迫った時、声がした。白いねずみの声だった。機関車はその声に制せられるように、ぴたりと速度を零にした。静止した。鼠は安心しながら、どこから聞こえたか分からない声に向けて言った。

「店長、どこに行ってたんですか。もう少しで畳が壊れて帰れなくなってしまうところでしたよ」

しかし、返事は帰ってこなかった。

「店長、いるんでしょ。出てきてくださいよ」

少ししてから機関車の中から声がした。

「ああ、ごめんよ。機関車を運転していたんだ」

一匹の白いねずみが機関車から降りてきて、鼠の傍に立った。

「置いて行かないでくださいよ、僕、まだ分からないことも多いんですから」

鼠がそう言うと、また機関車の中から声がした。しかし、先ほどより遠くの、後ろの車両の辺りからこの声は聞こえた。

「ごめんごめん」

これも井上店長の声だった。

機関車から、一匹白いねずみが降りてきた。

長い機関車の中からざわざわした声が聞こえ、次々と白いねずみたちが大波のように一斉に降りてきて、鼠の周りを囲んだ。

いずれも、鼠の知っている白いねずみと同じ大きさで、全く同じ容姿をしている。声は全員井上店長の声である。

鼠はどうしたものかと思ったが、今回の配達の依頼と関係しているのだろうことは分かった。それでも、本物の店長がこの中にいるかもしれない。

「すみません、この中に店長はいますか。銀河ピザの店長の白いねずみさんです」

鼠が聞くと、井上店長の声が一斉に答えた。

「ああ、俺が白いねずみだよ」

「俺だ」

「白いねずみは俺さ」

声が響きあって詳しく内容が聞き取れないが、とにかく、皆、自分のことを白いねずみだと言っているようだ。

確かに間違えてはいない。みんな白いねずみである。

「ピザ屋の店長の白いねずみです。ピザ屋の」

鼠が再びそう聞いてもやはり全員、自分がそうだとしか答えない。

「それでは、今回、ピザをご注文された白いねずみさんはいらっしゃいますか？」

やはり、これにも白いねずみたちは口々に、自分だ、自分だ、と言う。

鼠は困り果てた。

とにもかくにも、この白いねずみだらけの海の中には、何を喋っているかもはっきり聞き取れない。何せ、同じ声が少しずつタイミングをずらして何か喋るのだ。

鼠の一番近くにいた白いねずみが近寄ってきて、鼠の肩を叩いて言った。

「まあ、とにかくみんな白いねずみなのだ。白いねずみの間では全てが平等で、全てをみなで背負う。発言の権利もみな一様に平等。このまま話していても、あんた一人とオレたち全員じゃ話がまとまるまい。汽車に乗って、町に行こう。そこで珈琲でも飲みながら、落ち着いて話そうじゃないか」

そう言うと、鼠の肩をたたいた白いねずみは汽車の方へと歩き始め、口々に喋っている仲間たちに、同じ声で、

「町に行こう」

と言った。周りの白いねずみたちはその声を聞き分けたのかどうか分からないが、

「町に行くぞ」

「町で珈琲でも飲もう」

「汽車に乗ろう」

めいめい同じようなことを言いながら、順に鼠の肩を軽くたたいて、汽車に乗っていった。白いねずみたちに囲まれたまま、とんとん、と肩を叩かれながら、鼠も機関車に乗り込んだ。無数の白いねずみたち全員に肩を叩かれるのだが、不思議と痛くはない。鼠の周りにいた数匹の白いねずみたちが鼠を客車の一番前の個室へと案内した。個室の中には、木製のテーブルと四人分の丸椅子があった。鼠がその丸椅子の一つに座ると、三匹の白いねずみが残りの丸椅子に座った。

「やあ、これで何とか話しやすくなったろう。あれだけ大人数だと何を話しているか分からないだろう」

左隣に座った白いねずみが言った。

「はい、助かりました。ところで、僕と一緒に来た白いねずみはやはりご存知無いですか」

鼠が聞くと今度は右隣の白いねずみが言う。

「知っているとも。オレさ」

向かいの白いねずみも言う。

「そう、オレさ」

「オレもだ」左隣の白いねずみも言う。

「つまりだ」向かいの白いねずみが言葉を継ぐ。

「我々は実に平等なんだ。誰が誰でも困らない。みんな等しく白いねずみなのだ」

「そう、そして君も鼠なんだろう。やはり君も全ての鼠の中で平等だ」

鼠はわけの分からないまま、車窓に目を移した。揺れも機関車の音もしないのに、景色がすすると流れていて、時々、機関部の方から黒煙が流れていた。汽車はどこかへ向かって進んでいるらしい。

「でも、僕は、確かに鼠には違いないのですが、僕以外の鼠というのを見たことがないですよ」

白いねずみ三匹は驚いたような顔をして、こそこそと鼠にだけ聞こえないように何かを話し始めた。狭い閉じきった部屋のはずなのに、三匹の声は鼠には聞こえない。鼠は彼らが話し合っているのを無視して、仕事に取り掛かることに決めた。

「ところで、今回のピザのご注文内容はこういったものでしょうか？」

三匹の白いねずみは、まだ顔を見合わせている。車窓を流れる景色はどんどん速くなっていく。新幹線でもこんなに速く走ったものだろうか、と鼠は思った。

「君は透明人間ということか」

一匹の白いねずみが言った。鼠は一体何を言っているのか分からず、何も答えられなかった。

「君は君以外の君を見たことが無いのだろう」

別の白いねずみが話を引き継いでいく。

「君は君を見たことがない」

「そもそも君などというものが本当に存在するのか」

「我思う故に我あり？」

「君は君以外のものと接して初めて君として成立する？」

「我々は全て平等に白いねずみであり、君は全て平等に鼠である？」

「君は君以外の何者かによって存在を証明されている？」

「しかし、君以外の何者が君を知っているだろう？」

「しかし、君は君以外の君を知らない？」

「君は透明人間なんだろうか？」

声と声が時々かぶさっては過ぎていく。窓の外は真っ黒な煙で覆われて何も見えなくなってしまった。鼠はすっかり閉口してしまった。三匹の白いねずみ、一体、今、どの白いねずみが喋っているのかも分からないまま順に見詰めていく。鼠は白いねずみたちの言うことの明確な意味は分からなかった。しかし、白いねずみたちの言うことは、決して他人事ではない、全くわけの分からないような事象でなく、自分についての問題を鋭く心配してくれている、そんな風に鼠には感じられる。

廊下からもう一つ声が重なった。

「次の停車駅は町、町、次の停車駅は、町、でございます。どなたさまも、どの白いねずみ様もお忘れ物無きよう」

「町に着くぞ」

「町だ」

「町で降りよう」

三匹の白いねずみはそう言うと、そそくさと席を立ち始めた。窓にかかった黒煙が少しずつ薄くなっていくようである。

「もし、仮に僕が透明人間だとしたら？」

鼠は降りようとしている三匹に慌てて質問した。汽車から降りれば、また大勢の白いねずみに囲まれるかもしれない。そうなれば、どうにもならないかもしれない。

「どうにもしない」

「ピザの注文は取り消しだ」

白いねずみは足を止めて答える。

「本当に透明人間なのかい？」

「君はどうするんだい？ 第三世界に帰るのかい？」

「我々は君を白いねずみとして歓迎する準備がある」

「我々は全てにおいて平等であり、全てにおいて責任を共に負う」

「我々は我々の問題をみんなで解決する。全ての白いねずみは、須らく全ての白いねずみにとってのピザ屋である」

鼠は白いねずみになろうかと考え始めていた。自分が透明人間なのかもしれないと感じ始めていた。

「町です。町です。お忘れ物なきよう。全ての白いねずみは、全ての白いねずみの忘れものなきよう」

ドアの向こうから車掌が井上店長の声で言う。

三匹の白いねずみは鼠に向けて手を差し伸べた。三本の手はどれも白く、なめらかである。暖かく柔らかく見えた。

鼠はその手に救いを感じる自分に気付いた。鼠は自分の手が、白いねずみたちの手へと動こうとしているのを感じた。

その時、窓の外から何か轟音が聞こえて来た。鼠は、はっとして自分の手の動きを制した。鼠はこの轟音に聞き覚えがあった。轟音は次第に鼠へと近付いて来た。

鼠は三匹の白いねずみから逃げるように走って、窓に手を掛けようとする、窓が向こう側から開かれた。

「注文が入ったよ。さあ、宅配に行こう」

それは井上店長の声だった。白いねずみたちの声と同じであるが、鼠には確かにその声が井上店長の声だと分かった。轟音こそが、何よりの証拠、井上店長の愛する大型バイクのエンジン音だった。

## 六、逆写像 インバース f

鼠は窓枠に足を賭け、外へと飛び出した。

外は真っ暗な夜だった。どこかも分からない。しかし、前には鼠の見慣れたピザ屋の三輪のバイクが止まっていた。

鼠は慣れた手つきでバイクにまたがり、エンジンを掛けた。

「我々は歓迎する。今なら、まだ歓迎する」

汽車の方から白いねずみたちの声がする。

鼠は耳を貸さずに一気にアクセルを回した。井上店長のバイクの轟音のする方へ向けて、鼠は走った。真っ暗な闇、道かどうかも分からないところをバイクは走った。くたびれたポロ三輪は水の上を走るように地面からの衝撃を受けず、ただやかましい非力なエンジン音だけを響か

せ走った。黒い夜から急に白い光の霧の中へバイクは突入した。鼠はアクセルを緩めなかった。井上店長のバイクの音がゆっくりと小さくなるのが、鼠には分かった。

「おい」

不意に後ろから声がした。井上店長の声だった。

鼠はサイドミラーを動かし、後ろを確かめた。真っ白な霧の世界に畳がふわふわと浮かんでいた。畳はするすると速度を上げ、たちまち鼠の三輪バイクの横まで来た。畳の上には、白いねずみが一匹きりであぐらをかいていた。

「ほら、給料だ。助かったよ、ありがとうな」

白いねずみは鼠に向けて、掌を向けた。手の上には感謝の玉があった。白いねずみは続けて言った。

「良いか。霧を抜けるまでそのまま真っ直ぐだ、絶対にアクセルを緩めるな。霧が終わったらすぐにブレーキをしろ。絶対だ」

そう言うと、白いねずみを乗せた畳は高度を上げ、霧の中へと消えていった。

井上店長のバイクの轟音はもう聞こえなかった。

鼠は真っ直ぐに走り続けた。何の音もせず、ただ白い世界が続いた。鼠は心から怖いと思った。しかし、鼠はアクセルを緩めなかった。

突然に霧が終わり、鼠はブレーキを引いた。

赤信号が光り、鼠の目の前を四トントラックが横切って行った。

鼠は血の気が引くのを感じた。自分の心臓の音が聞こえるようだった。ブレーキを引かなければ自分は死んでいただろう。

動悸がおさまると鼠は辺りを見回した。見覚えのある道、普通の夜の宅配の道だった。

信号が青になると、鼠は慎重にバイクを走らせた。目の前のアパートが見えた。少し古い何の変哲もない二階建てのアパートだった。どうしてだか鼠自身にも分からなかったが、自分は今そのアパートに向けて宅配している最中だと感じた。階段のわきにバイクを止めた。宅配ボックスを開くと、保温バッグと伝票があった。伝票の届け先には、203号室とだけ書かれていた。

鼠は鉄製の階段を小走りでカラカラ足音立てながら登っていった。

チャイムを鳴らした。

チャイムの音が途切れた瞬間、そこが自分の部屋だと気付いた。

扉が開き、まばゆいばかりの光が鼠を包む。

## 七、第三世界

「ネズミさん、起きてください。ネズミさん」

鼠を呼ぶ声がある。鼠は思った。一体誰だろうか。いまだに自分を鼠と呼んでくれるやつがいたのだろうか。いや、ついさっきまで自分はいろんな連中に「鼠」と呼ばれていた気がする。しかし、そんなはずはない。高校の頃、そう呼んでくれていた友は、みんな遠くに行ってしまった。そいつら以外に自分を鼠と呼んでくれるやつは存在するはずもない。しかし、不思議と、ついさっきまでとても近くで自分を鼠と呼んでくれていたやつがいたような気がする。だが、そいつらもついさっき遥か遠くへ行ってしまったような気がする。妙な寂しさが胸にある。

「ネズミさん、ネズミさん」

鼠がゆっくりと目を開いていくと、女がいた。銀河ピザの制服を着ている。笹野だった。鼠は畳の上で寝ている自分に気付いた。昼の営業の時に濡れたシャツは不思議なまでに綺麗に乾いていた。

「店の方の電話でマネージャーが呼んでますよ」

「ありがとう」

鼠は起き上がって、店舗の方へと向かった。寝起きにしては珍しく頭がすっきりしていた。

「ねえ、さっき鼠って呼んだかい？」

雨はだいぶ弱くなっていたが、まだ止んでいなかった。

「あれ、いけなかった？ さっき休憩に入る前にそう呼んで良いって言ってたじゃん」

「そうだったっけ」

「そうだよ」

「そうか」

ポケットの中の携帯を見ると、マネージャーからの着信が五件あった。時間を見るが、まだ夜の営業の時間まで一時間以上ある。後ろを笹野がついてきた。

店舗に行き、上がったままの受話器を取る。

「もしもし、すみません、携帯マナーにして寝てたんで、着信気付きませんでした」

「ああ、休憩時間だったし良いよ」

それから、マネージャーは井上店長がバイクで事故したことを伝えた。命には別状ないが、仕事の復帰には時間がかかりそうなこと、もしくはもう働けないかもしれないということ。マネージャーはクレーム処理のように淡々とした口調で言った。鼠は、ぼんやりとして、相槌を打ちながら聞くばかりだった。鼠には井上店長がバイクで事故を起こすなど信じられなかった。

「で、今晚、井上君、シフト入ってるのかな。月曜だから休みかな」

「いや、今日は夜だけ入ってますよ。どうしましょうか」

「とりあえず、今晚の営業はなるべく早くオレも行くけど、まだもう少し病院にいないといけないんだよ。それで、今晚入っている君に連絡したんだ。君なら一応は店の回し方も分かるだろうし、オレがそっちに着くまでよろしく頼むよ。必要だったら、誰か一人二人応援を呼んでくれ。その辺は任せるよ。じゃあ、また連絡するよ」

通話は切れた。

「ねえ、どうしたの？」

笹野が聞いた。

「店長が事故ったらしい」

「え、そうなの？ どうするの？」

「なぜか、今日は僕が店を任されたよ」

「そっか」

それきり笹野は何も言わずに、ただ鼠の横に立っていた。

鼠は松井に電話し、事情を説明した。松井はオフだったが、できるだけ早く来てくれるとのことだった。マネージャーも遅くはならないと言っていたのを考えれば、笹野と鼠と松井の三人いれば平日の夜は何とか回る。

鼠は悲しかった。それは単に知り合いが事故に遭ったという悲しさとは違うと思った。大事な人が事故に遭ったのだと思った。なぜ、井上店長が自分にとって大事な人間だと思うのか、分からない。鼠は、寝ていた間にどこか凄く遠くでとても長い時間を過ごしていたような気がするのだが、何も思い出せない。

ただ、鼠は悲しくてぼんやりと店の電話の前にいつまでも立っていた。その鼠の横で笹野は何も言わず、鼠の隣にただ立っていた。

松井は夜の開店とほぼ同時に来た。マネージャーも忙しくなる前に店に着いた。

井上店長がいなくとも、銀河ピザはいつも通りの営業をした。いつもと同じ材料で、同じオーブンを使い、ピザを焼く。いつもの三輪バイクが配達のため走る。

誰も井上店長のことについて口にしなかった。

「ちょっと良い？」

忙しい時間が終わり、宅配が途切れた頃、マネージャーは鼠を裏へ呼んだ。

「店長やる気とかない？」

マネージャーは鼠に聞いた。

「僕がですか？ 井上店長はどうするんですか？」

「井上君はもう駄目だろう。戻るのに早くても半年はかかる。うちは大きい会社でもないから、悠長に彼を待っているわけには行かない。とにかく、当面の問題として店に店長は必要なんだ。正社員として働く気は無いにしても、しばらく店長代理してくれないかな。何だかんだで大学の頃からずっといるし、勝手は分かるだろ。それに、君、今は、これ以外仕事もしてないんだろ。しばらくはオレが来てサポートはするけど、他の店も回らないといけないし、いつもいるってわけにはいかないから。勿論、時給は上げるからさ。どうだろう」

鼠は考えた。悪くない話だと思った。どうせ、自分には他に何かするあてもなかった。地方チェーンのピザ屋の雇われ店長なんてうらぶれているかもしれない。それこそ、うらぶれちまった自分にぴったりの仕事かもしれない。どうしたって辞めたくなれば逃げたって構わない。どうせ他にすることもない。

「店長代理いいですよ。社員についてはちょっと考えさせてください」

鼠は簡潔に答えた。

マネージャーはそれ以上井上店長について何も話さなかった。

松井は店が落ち着くと帰って行った。やはり井上店長については何も話さなかった。

マネージャーはしばらく残って、シフト調整をしたり、店長代理の仕事内容を鼠に教えていたが、社長に呼ばれて行ってしまった。

注文の少ない夜だった。

鼠と笹野は静かに片付けをして、店を閉めた。着替えを済ませ、鼠が売り上げを入金しに行くのに、笹野はついてきた。ほとんど雨は降り止んでいたが、時々、肌に水滴が落ちてくるのを感じた。傘もささずに二人は歩いた。

「帰らないの？」

鼠は言った。笹野は何も答えない。鼠が振り返って笹野を正面から見ると、暗い街灯に照らされた私服姿の笹野は確かに高校生なのだと思った。大人になりきれない幼さのような、縁日の膨らんだ水風船のような若さがある。しかし、その顔には、自分が高校生だった頃にはなかったであろうものがある。

鼠は自分でも気付かないうちに笹野の手を握ろうとしていた。

笹野は鼠の指先が触れた瞬間、トゲにでも触れたように体を震わせ、鼠の手を払った。鼠には、全てが予想外の動きだった。自分が笹野の手を握ろうとしていたことも、それを激しく拒否した笹野の反応も。ただ、それは予想外だっただけで、驚きもしなかったし、ショックでもなかった。鼠はどうとも思わなかった。拒否されたことに関して、腹も立たなかったし、悲しくもなかった。何事も無かったかのように鼠は歩き続けた。笹野は何も言わず、後ろをついて歩いた。

銀行に着いた。笹野は夜間金庫のある小部屋には一緒に入ってこなかった。

鼠は急に元気がなくなるのを感じた。夜間金庫のある小部屋は公衆電話の箱より少し広いくらいで、天井に蛍光灯が灯っている。壁に鍵穴のついた金庫の入り口があるだけの部屋。どうして笹野は一緒に入って来なかったのだろうか。特に他意はないのかもしれない。ただ、笹野と同じようにみんな特に何を思うでもなく自分から離れて行ってしまふのかもしれない。これまで、いろんな人間が遠くに行ってしまった。いや、自分がいろんな人間たちから遠くに去って行ってしまったのかもしれない。自分は孤独に違いない。金が金庫の中へと落ちて行った。鼠は丁寧に鍵をかけた。夜間金庫の入金ごときにセンチメンタルになっている自分をおかしく思った。しかし、特に変なことじゃない気もした。自分のような立場に立てば、誰だって夜間金庫の小さな部屋で孤独を感じてしまふに違いない。

「ネズミさんって珈琲で良かったっけ？」

夜間金庫の小部屋から出ると、笹野が珈琲を差し出しながら言った。不意の親切に鼠は戸惑った。

「え、どうしたの？」

「いや、昨日、給料日だったし。自分のだけってのも悪いでしょ」

鼠は井上店長を思い出した。給料日後のバイト上がり、突然に何も言わず缶コーヒーを差し出

してくる井上の姿が思い出された。

「ねえ、ネズミさん。ネズミって響きって良いね」

「うん、僕もそう思うよ」

「ねえ、今日、遊びに行っても良い？」

「僕の家には？」

「それ以外どこかある？」

「いや、僕は今日はもう寝るよ。何だか眠たいんだ」

鼠は嘘を付いた。いつも眠たい鼠だが、井上店長が事故に遭ったと聞いてから全く眠たくなかった。ただ、凄く疲れていた。

「わたしもすごく眠たいのよ。今日は疲れちゃった」

笹野はわざとらしい欠伸をした。

「なのに僕の家遊びに来るの？」

「だって、ネズミさんの横って、とっても寝心地が良いから」

「それだけの理由で？」

「だって、井上店長があんなことになっちゃったんだもん」

そこで会話は途切れた。二人は何も言わず、店まで歩いた。

笹野は鼠の後ろをついて家まで来た。

鼠は家に着くと電気も付けず、真っ直ぐベッドに行った。隣に笹野が眠れるだけの場所を開け、横になった。笹野は休憩室の畳と同じように鼠の横に寝転がった。

しばらく二人は身動き一つせず、何もせず寝転がっていた。ただ、どちらも互いが眠っていないことが分かった。空気を伝って互いが起きているということを感じていた。

「ねえ、わたしも、いずれ店長みたいになっちゃうのかな」

不意に笹野が言った。

「君はバイクに乗らないだろう」

「うん、乗らない」

「なら、事故をしないよ」

「そういう問題じゃないの。ネズミさんだってバイクを乗らなくてもいつか井上店長みたいになっちゃうかもしれない」

笹野の言わんとしていることは鼠には分かった。鼠も同じ思いを抱いていた。

笹野は鼠を抱き締めた。鼠は抱き返しもしなかったし、何も言わなかった。抱かれるがままに抱かせてやった。笹野はそのまま寝息を立て始めた。鼠は抱きしめられたまま、ぼんやりと暗い天井を眺めながら考えた。

自分はうらぶれちゃったのだ。そして、隣にうらぶれた女がいる。うらぶれた店長は大好きなバイクに乗って、事故をした。

「なあ、どうして僕は大学を辞めちゃったんだろう。僕はどうして鼠だと言いつけなかったのだろう。君はどう思う」

笹野は眠っていて、鼠の質問には答えない。

「じゃあさ、逆の質問だよ。僕は大学に行っていたらどうなってただろう。鼠だと名乗って、そ

う呼んでくれるやつらが何人もいれば、僕は幸せだったろうか」

笹野はやはり何も言わず寝息を立てていた。

鼠は深い眠りに落ちた少女の頭に優しく手を添えてやった。

鼠の掌に笹野の痛んだ髪を隔てて人間の体温が伝わる。鼠はそれをとても温かいと思った。いつまでも掌にその温かみを感じていたいと思った。鼠はぼんやりと眠りに落ちる。

鼠は頭に重さを感じた。重さは次第に痛みへと変わって行き、意識が戻るのを感じた。大量の赤ワインが数時間前に鼠の脳に到達し、痛みが変わっているのだと分かった。

鼠は暗い部屋で一人、机の上で数学の書籍を下敷きにして突っ伏していた。机の上にはコップが倒れていて、赤ワインが床へと滴り落ちている。

鼠はゆっくりと重い体を起こした。何か食べねばならないと分かった。

かすむ目をこすりながら、台所に行き、鍋に水を入れて火にかけ、パスタを入れた。

鼠は、ぼんやりと嘘の世界に違いないと思った。

嘘の世界で、嘘の自分はパスタを茹で、食い終われば数学をしようとしている。

何が嘘なのかは分からない。ただ、間違いなく、今自分がいる世界は嘘の世界だと思った。

鼠は何の気無しに、ポストから落ちて玄関に散らばったチラシの中から一枚青い紙を取った。それはデリヘル広告だった。鼠はそれを丁寧に折って紙飛行機を作った。

鼠は誰かが助けに来てくれないかと思った。

台所の、油で汚れた窓ガラスを開ければ、真っ白なネズミが夜の闇を突き破って助けに来てくれないだろうか。

窓に向けて、自分の手が伸びるのが分かった。窓枠に手が掛かる。自分の筋肉がゆっくりと窓を開けるようにと動くのが感じられる。

外には夜が広がっていた。冷たい夜だと感じた。バイクの走る音が聞こえた。

バイクの音が遠くに溶けていくにつれて、鼠はベッドに自分の大事な人が眠っている気がした。それが誰なのかは、どうしても鼠には思い出せない。代わりに、自分は、白いねずみのいる世界から去って来たことを思い出した。

今、ここはどこなんだろう。僕はどこに行くんだろう。みんなどこに行っちゃったんだろう。どこにいるにせよ、とにかく自分はいらぶれちゃったのだ。

鼠は認めた。

鼠は、手に持っていた青いデリヘル飛行機を窓の外の夜に向けて投げた。デリヘル飛行機は、廊下の手摺の向こうへと墜落して行った。

不意に、掌に温かさを感じたような気がした。

鼠は窓を閉めて、部屋に戻った。閉めきっていたカーテンを全て開き、ベッドに倒れた。

自分の今いる場所も、この先いるであろう場所も鼠には分からない。それでも、これから行く世界には、自分に優しくしてくれる女がいることを鼠は知っていた。鼠はその女に優しくあろうと思った。

(了)